COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

セイレーンの聖母

若木未生



集英社

まず狙われたのは、十九郎だった。何者かの呪縛が激しく行き交う車の流れの中に彼を誘ったのだ。次に希沙良が強烈な妖気を胸に受けて昏倒した。そして、ついには亮介までが!!敵はいずれも女。しかも、とてつもない妖力。恐るべき奴等の正体は？　姿を見せぬ謀の行方は？　総帥・忍に策はあるのか？　そして冴子は!?——一層スケールアップした手に汗握るハイスクール・オーラバスター第2弾!!

恋を夢みる乙女のための小説誌！

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

セイレーンの聖母

若木未生

集英社

目　次

セイレーンの聖母

序章　セイレーンの魔女……8
1　予兆……15
2　夏江……35
3　妖女襲来……59
4　再会……76
5　宿命……94
6　血の河……113
7　伏兵……130
8　救い……149
9　召集……168
10　「坊やのお守りはどこへ行った」……187
11　祈り……204
終章　それから……222
あとがき……225

登場人物紹介



和泉希沙良
〈術者〉のひとり。奔放な性格だが、十九郎以外にはなかなか心を許さない。幼時の母の死が原因らしいが…。



里見十九郎
沈着冷静な参謀型の〈術者〉。希沙良のいとこでフォロー役。妖女・皓に狙われ、新たな敵の出現を知る。



崎谷亮介
おとなしく内向的だが、〈術者〉グループの切り札的存在。術力をコントロールできないのが難点だが…。



神原亜衣
亮介の同級生でGF。〈術者〉ではないが事情を知っており、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。



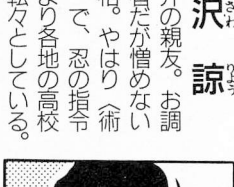
水沢 諒

亮介の親友。お調子者だが憎めない性格。やはり〈術者〉で、忍の指令により各地の高校を転々としている。



七瀬冴子

味方のダメージを回復させる能力を持つ〈術者〉。強気が専売特許の美少女で、諒とはよく衝突するが…。



斎伽 忍

〈術者〉一族の若き総帥で、ただひとりの〈空の者〉。一連の事件の全貌を把握しているのは彼だけらしい…。

イラスト／杜　真琴

セイレーンの聖母

序章　セイレーンの魔女

マンションの門を出ると、彼はふと視線を泳がせた。
晴れ渡った空とは裏腹に、寒気は根強く居座っている。つい先日降った雪がまだ道端に残っているくらいだ。
春休み、という言葉に、必ずしもふさわしい気候ではないだろう。
（まあ、世間一般よりは早い春休みらしいけどね……）
門の掛け金をおろし、コートの襟を合わせて歩き出す。
彼――里見十九郎は、この春、高校三年に進級する。正真正銘の受験生になるわけで、休みだからといって遊びまわってばかりもいられない立場である。人の立場に無理解な人間は、しかしどこにでもいるものなのだ。
（無理解というか唯我独尊というか……）
思い出して、十九郎はかすかに苦笑した。

俺の学校より半月も早く学校が終わるなんて横暴だ、それは不条理だ、そのころ期末試験をやってる俺の立場はどうなるんだっ、と電話口でわめきたてたのは、彼の従弟たる和泉希沙良である。

うちは私立でおまえは都立なんだから、という常識論を一歳年下の従弟は頭から相手にせず、たどりついた結論が「そんなにヒマなら一緒に遊ぼう！」だったとなるとこれはもう苦笑するしかない。おまえはいくつだ、と訊き返したくなるが、彼のわがままはこれにはじまったことではないし、厄介なことに十九郎自身がそのわがままに毎回律義につきあってしまっているから何も言えない。

まあ、遊ぼう、との言葉のあとに「崎谷も誘うから」とつけ足すようになったのは、ひとつの進歩と言えば進歩かもしれない。

昨年の秋にとある事件で知り合った崎谷亮介という少年を、希沙良は思いのほか気に入った様子で、時々連絡をとりあっているらしい。希沙良にしては珍しいことなのだ——他人に気を許すようなことは。

（まったくあいつは神経質で口うるさくて自分勝手で意地っぱりの問題児だから……）

彼に関する表現ならいくらでも出てくる。お守り役としては十年以上のキャリアを誇っているのだ。いかんせん、いざ誉め言葉を探すとなると何も出てこなかったりするが。

十九郎は横断歩道で立ち止まり、時計に目をやった。

自由が丘の駅まで五分もかからない。待ち合わせは渋谷駅――要するに希沙良の地元である――で、時間にはかなり余裕があった。

何も問題はない、はずだ。

貴公子然と人に評される怜悧な瞳を上げて、十九郎はふっと眉をひそめた。

唸りをあげて目の前を自動車の群れが走り過ぎてゆく。

ごく普通の交差点の光景。なのに。

「？」

何かが、おかしい。何かが狂っている。違和感が離れない。

（――誰だ？）

誰かの意識が向けられているのを感じた。視線、というより、ひどく強い関心……。

（誰だ）

それはなにか言いようもない不快感を与える意識だ。

十九郎は思わず背後を振り返った。不審な人影はない。

小学校低学年くらいの少女が隣で信号待ちをしているが、彼女からは特に何も感じられない。

向かいの歩道には誰も――。

「！」

一瞬前までは誰もいなかった。
十九郎は息を詰めた。まずい、と心のどこかが警告している。
女がひとり、ふわりと黒髪をなびかせ、そこに立っていた。
この寒空の下、目のさめるような青のワンピース一枚でこごえもせずに。
ほっそりとした長身に、雪女を連想させる白すぎる肌。
真っ赤な唇はかすかに笑みの形をつくり。
――そしてその両眼ははじめから十九郎だけをとらえていたのだ。
（何!?　……）
ずしん、と衝撃がきた。
目を合わせた途端、視界が真っ白になり、自分がどこにいるのか何をしているのか、そんなことの一切が無と化した。
（幻覚！）
十九郎は心中で叫び、意識を集中しようとした。幻覚にとらえられたのはこれが初めてではない。術の破り方も会得している。
むざと幻惑に陥ちはしない、という自信があった。それをこうもあっさりと……。
『誰だ、貴様は!?』
ぎりぎりと拘束される意識から、激しい問いをひきずり出し、叩きつける。見えるのは、能

面のごとく白い女の顔だけだ。
『私か』
歌うように女が答えた。いや、そうではなかった。
女は本当に歌っていたのだ。
『私は導く者——導く光』
メゾソプラノ。
目を閉じることが出来ない。思考が空回りする。女の言葉は聞こえず、意味となって心まで届かず、ただ悲鳴のようにきんきんと反響だけが空間を駆けめぐり、そして。
『おいで』
微笑を凍りつかせたまま、女が招んだ。
ああサイレンの魔女か、と十九郎は呟いた。声にならなかった。
どうすればこの呪縛を脱けられる？　……知っている。知っているはずだ。わかって、いるのに。
『おいで』
女は繰り返した。
『眠らせてあげるよ』
『……』

駄目だ、支配されてはならない。そんなことになったら……。
（そんなことになったら――何だ?）
呟きは、ブレーキになり得なかった。自動人形のように、体は前に向けて動き出そうとした。
刹那。
ふっ、と視界の隅に動くものがあった。
（まさか）
十九郎はハッと息を呑んだ。目隠しが落ちたように光景が復活する。
少女が――そうだ、隣には小さな女の子が立っていた――ふらりと、車道に踏み出すところだった。
信号は変わっていない。術に陥ちたのは自分だけではなかったのか!?
『貴様!!』
時間の進みが極端に遅くなっていた。十九郎は女に向けて怒鳴ろうとして、出来なかった。声が出ない。思念だけが響いて。
体は動かない。
車の流れが押し寄せる。まっしぐらに、少女を目がけ。
迫る。迫って……運転手が気づいた。ブレーキをかけるけれど。タイヤが金切り声をあげる

けれど。見える。すべて見える。

——間に合わない。

「よせ！　何のために——こんな、ことを!!」

血を吐く思いで叫び、呪縛を振り切る。何も迷わず、手を伸ばした。

呆然と立つ少女と、甲高い急ブレーキの狭間へ。

1　予兆

定刻に着いたら、感心なことに希沙良はもう壁に背を預けて待っていた。亮介は手を振ろうとして、思わず「うっ」と呟いた。

渋谷の人ごみの中でもすぐに見つかる、という利点はわからないでもない。しかし百七十八センチの長身に加えて鋭い印象を与えるはっきりした顔立ちだけで、その目的は充分果たされると思うのだ。

（それをわざわざ……）

複雑な表情で亮介が近づくと、希沙良は黒のグラサンをずらして、ちらっと目を見せた。

「よう」

「……そういえば俺って、希沙良の制服姿しか知らないんだよね」

亮介は言葉を嚙みしめた。

なんたって、上から下まで黒ずくめである。それもレザーである。しかもビョウまで入って

いる。さらにそれが似合いまくっているから……何も言えない。

（目立ちまくり……）

もしかして本人は、自分の容姿が人目を引くことに気づいていないのではなかろうか。

「パンクスっていうのか？　こういうの」

「そういうこと考えて着ないんだ、俺」

「はあ……」

どうもセンスの次元からして違うらしい。

「まあこれはさ、女がくれたから、一応着てみたという。やっぱ礼儀だろ」

「服なんかくれるわけ!?」

「ああ、なんか『着てください』ってさ、ひと揃いくれた」

「……」

環境もこの分だとすさまじく違いそうだ。眼鏡を押し上げ、亮介は大きく息をついた。

身長百六十四センチの亮介を余裕で見下ろして、希沙良がこつんと頭を小突く。

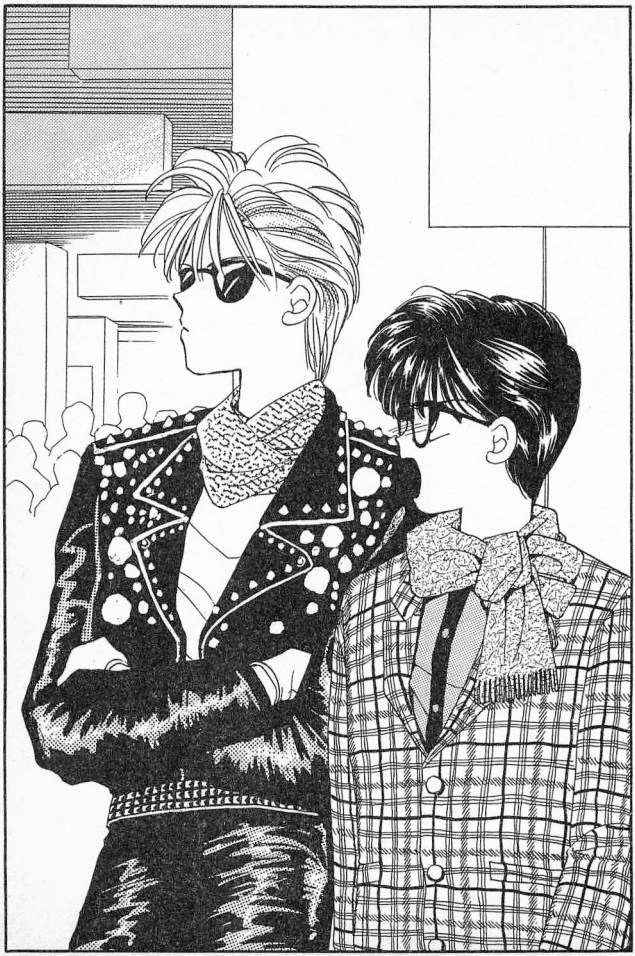
「崎谷もさあ、いつまでも女に頭なでられてたりするなよな。カワイイって言われてるうちは未来がないぜ」

「なんとかしようと思って背が伸びればいいけどさ……」

「背じゃねえよ。全体の印象がさ、そもそもカワイイんだよな」

「どうしろというんだ」
がっくりきたところに追いうちのごとく希沙良が言い、亮介は恨めしげにぼやいた。
一応、このガキっぽい外見について、本人としては非常に気にしているのだ。えらく気にしてはいるのだ。そういうことをポンと言ってしまうあたりが希沙良の希沙良たるゆえんでもあるが。
（まあ、言ってることは正しいんだけどね……）
世の中、それで全部納得出来たらトラブルはありえないのだ。
問題の当人は気にとめる様子もなく時計なんぞを眺めている。
「しっかし、十九郎の奴、これでビリだな。またおごらせたる」
「里見さんの人のよさをかんがみるに、それを見越してわざと遅れてくるくらいの芸当もやりそうだなー」
呟いて、亮介は希沙良に並んで壁によりかかった。希沙良が目を瞠った。
「よく把握してるな、あの性格」
「……わかっててやらせてるだろ、もしかして」
「当然。だってあいつ金持ちだもん」
「し、しかし……」
十九郎の心の広さに改めて感じ入ってしまう。

亮介はしみじみと希沙良の横顔を見上げた。
「希沙良って、幸せだなあ」
「おまえね――」
ずる、と希沙良の肩が壁をすべった。頭を抱えている。
「だって本当じゃんっ」
「ばあかっ。やめんか、そういう目のまわるよーなことを言うのはっ」
「だって本当じゃんっ」
しつこく念をおして亮介はにんまりと笑った。
「暗いだけかと思ったら性格も悪かったんだな」
宙を仰いでぶつぶつと希沙良が呟く。
「最初に会った時なんか、まるっきりびくびくおどおどしてたくせにさー……ああやだやだ、これだからA型は」
「なんだよそれ」
「ちょっとつつけば泣き出しそーな奴だとか思ったのにさー……こんなにふてぶてしくなるとは。猫かぶり猫かぶり」
「わざとらしくため息つくなってば」
ふたりが立っているのは、渋谷駅構内の東横線改札口前である。



幅のある改札の前はちょっとした広場になっていて、わらわらと人が流れていく。時計を見ると、定刻の三時を十分ほどまわっていた。

「にしても、ちょっと遅いな」

希沙良が、やや真顔になって言う。

「十九郎ってA型の典型だからなー、遅れるにしたって限度があるよな」

「希沙良ってもしかしてO型だろ」

「おおあたり」

ホームに列車が入り、どっと客が降りたが、十九郎の姿は見出せなかった。

「とりあえずあと十分待つ。んで、来なかったら置いてくことにする」

ポケットに両手を突っ込んで、希沙良はあっさりと言った。

「置いてくって……」

「だって次の回に間に合わねえだろっ。俺は予告編からしっかり観ないと気がすまないんだっ」

「あ、そ……」

驚異のSFX超大作、というお決まりのあおり文句で大ヒットしている映画のことである。

そもそも、希沙良が三人分の割引券を手に入れたというのが事の起こりなのだ。期末試験の最中で死にまくっている亮介のところへ突然電話してきて、「まさかイヤとは言うまいな」と

脅迫もどきの誘いをかけた時には何事かと思ったものだった。

奇しくも亮介と希沙良の学校日程は完全にダブっていたので、試験休みを利用するということで話はついた。明日は答案返却日である。確かに、家で物理の点数におびえているより、街にくりだして遊んでいるほうが建設的ではあるかもしれない。

（う、物理……）

嫌な言葉を思い出してしまった。亮介は明るい話題を捜し求めた。

「……ところでなんで東横線なわけ？　里見さんの家って三鷹にあったよな、確か」

一度だけ、邸宅に行った（正確には運びこまれた）ことがある。たいした豪邸で……あそこから来るなら、亮介同様ＪＲか井の頭線のはずなのだ。

「あれ、言わなかったか？　あれは十九郎の親父さんの家だってば」

「は？」

「お袋さんと十九郎は自由が丘のマンションでふたり暮らし」

「……」

「要するにさ、籍入ってないんだよ。あそこの親って奇特なふたりでさ。だから里見ってのはお袋さんのほうの姓なわけ。親父さんは、片桐建設ってあるじゃん、あそこの社長で」

（し、知らなかった……）

片桐建設という名は確かに聞いたことがある。かなりの大手で、テレビのＣＭでもそういえ

ば見たような気がする。
「じゃ、もしかして跡取りだったりして……」
「あ、それなー」
希沙良が言いかけて、くくく、と思い出し笑いをした。
「だからさあ、その片桐社長が本当に奇特な親父なんだって。あの人、養子も含めて子供が二十三人いるんだぜ」
「――!?」
「すっげえお人よしというか肝のすわった人でさ、孤児とかどんどん引き取っちまうんだ。で、子供は好きだーとか言っちゃって、本妻いるけど外にも子供作って、全員認知して育ててんの」
「……な、なんか豪快な人だな」
「だろ？　だろ？　そんでさー……」
続けようとして、希沙良はけたけたと笑っている。
「十九郎ってのがさ……」
「あ。まさか」
亮介はあんまりといえばあんまりな予感に声を震わせた。
「十九人目っ!?」

「そう、それっ！」
「――」
これは笑うしかない。しかし笑ったら失礼という気もする。希沙良は腹を抱えて爆笑していた。
「……まさかそんなことだけはあるまいと思っていたのに」
「あそこの親に常識は通用しないっ。誰より俺が知っているっ」
「しかし、俺がその立場だったらグレるかもしんないなー……」
想像すると怖い。亮介はかすかにめまいを覚えて額に手をやった。
希沙良は笑いが止まらず、ごほごほと咳こんでいる。
「そうか、里見さんって偉大だったんだ」
「グレようとするエネルギーがひんまがってお人よしのほうに逆流したのかもしれんぞ」
「なんなんだそれは」
「ま、とにかく金はあるし、両親は仲いいし、環境はいいんじゃねえの？」
「そういうもんだろーか……」
十九郎とは生まれたころからのつきあいだからだろうか、希沙良はきっぱりと断定する。かえって亮介のほうが不安になってしまった。
「え……ってことは、希沙良の家とはどういうつながりになるわけ？」

「ああ、それか。母親同士が姉妹ってやつだよ」
不意に、希沙良の口調から笑みが消えた。
それ以上コメントしない。……聞かれたくない話題なのかもしれない。
（えーと……）
思いがけず沈黙が長びいて、亮介は焦った。
別に、無理に身の上話を聞こうというのではないのだ。
（わ、話題を……）
「そういえばさあ」
ボソッと希沙良が口をきった。
「水沢っていたじゃん。あれ今、どうしてんの」
「あーあれ……」
話が変わって内心ホッとしつつ、亮介はため息をついた。
「例によって全国をまわっているそーです」
「なんか演歌の巡業みたいだな」
「せめて『炎の転校生』と言ってやりたい……」
四か月ほど前に「絶対すぐに帰ってくるっ」と言いはって出かけておきながら未だに帰ってこれない哀れな転校少年こと水沢諒は、以前希沙良と大乱闘を繰り広げたことがある。

どちらも亮介を守ろうとしたばかりに起きてしまった同士討ちだが、その出会いが悪かったのか本来相性が悪いのか、このふたりはどうにも非友好的である。亮介としては気が重い。

「あいつなー、あいつ、戻ってこないといいなあ」

「……もしもし？」

「あいつ、俺より背が高いからキライなんだ」

吐き出すように希沙良が言う。どうやら本心から言っているらしい。

（それ言ったら俺はどうなるんだって……）

一応友人として諒を弁護しなければとも思うが、そういう基準に対して何を言えばいいのか。亮介は仕方なく沈黙を通した。

それにしても、ここまで言いたい放題言う人間も珍しい。

（学校とかでもこんな感じなのかなー、やっぱり……）

相手によってはひどい反発を招きかねない。敵を作りまくるタイプだ。波乱を起こしやすい性格に違いない。

が、要するに希沙良は嘘をつかないのだ。

自分をごまかすことが不得意なのだと思う。常に自分の心に対して誠実なのだ。

本当のことを話してくれている、という実感は時として何よりも嬉しい。その姿勢は爽快ですらある。真似は出来ないことだから、なおさらそう思えるのかもしれない。

だから、亮介は希沙良を嫌いになろうとは思わない。多分、十九郎もそうなのだ。必ずしも彼のすべてを肯定するわけではないが。

「お。時間切れ」

腕時計に目を落とし、希沙良が顔をしかめた。

「よし、もう待たんぞ」

「本当にいいのかなー……」

「いいんだよ、どうせチケットは渡してあるんだし」

映画のあとに必ず寄る店まで十九郎は承知しているから合流するのは簡単なのだ、と希沙良は説明した。それでも来ないのなら、どうしてもはずせない用事が入ったものと考える。

行動を互いに読み切っている。幼なじみとはこういうものか、と感心しつつ亮介は希沙良に続いて歩き出した。

――そして、映画が終わり、喫茶店で一時間以上ねばっても、とうとう十九郎は姿を見せなかったのである。

外来患者の受付はとうに終わってしまっている。

蛍光灯もほとんど消されて、誰もいない待合室は簡素なソファばかりが並び、がらんとして

寒々しい。

総合病院としてはかなり有名な所である。特に外科には定評があるのだ。信頼しなければなるまい、せめて……。

がしゃん、という音がして十九郎は目を上げた。無愛想な看護婦が正面入口の鍵を閉めたところだった。

「帰る時は裏口から出てくださいね」

そう言い捨てて戻って行く。

「……」

時計を見上げると、八時を過ぎていた。思ったより時間がかかっている。

「里見さん?」

背後から、声をかけられた。男の声だ。

十九郎は振り向き、立ち上がった。連れだって階段を降りてきたのはまだ若い夫婦だった。ふたりとも、やや上気した顔をしている。

「あの子、大丈夫だそうです。ようやく落ち着きまして、もう心配ないって先生が……どうも本当にお世話になって……」

「そうですか」

十九郎は深く息をついた。

「よかった……」
「里見さんのおかげです！　なにからなにまで……」
まだ二十代らしい父親が勢いよく頭を下げる。
「先生にも言われました。高校生であれだけ応急処置を知っている人は少ないって……里見さんのおかげで加奈子は命びろいしたって……もう、いくらお礼を言えばいいのか」
「やめてください」
うつむいて、十九郎は低く言った。
「そんなことはないんです……」
「とんでもないです、そんな」
母親は目を真っ赤にしていた。
「ありがとうございました、本当にありがとうございました」
「……」
それは違う、と告白しようとする衝動を十九郎はぐっと抑えた。
違うのだ。自分の状態さえ万全なら、彼女が車道に出る時点で、引きとめることは出来たはずだ。それだけの余裕は確かにあったのだから。
本来なら、ここに運びこまれるはずだったのは、自分ではないのか。少女は巻き込まれ、身代わりになっただけではないのか。

それを——自分は、何も出来ずに、彼女が車に轢かれるのを手をこまねいて見ていたのだ。ただ……見ていたのだ。

一瞬だけ目を閉じる。

それからかなりの意志の力で十九郎は顔を上げた。

「……入院は、いつまでですか」

「だいたい二か月程度だそうです」

「そう、ですか……では、またお見舞いにうかがいます」

若夫婦には、何の責任もない。彼らにあたるわけにもいかない。

（この人たちは被害者なのだから……）

事故だと思っていたほうが彼らには幸せなのだ。余計なことは言うまい。十九郎はふたりに軽く会釈すると、ソファに置いてあったコートを取った。

「こちらこそ、御挨拶に……必ず。じゃ、失礼します」

慌ただしく頭を下げると、ふたりは病室に戻って行く。

十九郎は歩き出そうとしてコートに残った血痕に気づき、動きを止めた。

「十九郎……」

遠慮がちに呼ぶ声に、視線を上げる。

息をきらして、希沙良が薄暗い待合室に入ってくるところだった。亮介がそれに続いて現れ

る。

「……どうした？」

感情のあまり入らない声で、十九郎が訊いた。

「家に電話したら……おまえが事故に巻き込まれたって……」

やや気後れしたように希沙良が答える。

「怪我は……ないんだな」

「あれは事故なんかじゃなかった」

鋭い言葉に、まぎれようもない怒り。

え、と希沙良が聞き返した。

「本当は事故なんかじゃないんだ。あの子は身代わりになって……俺の力が足りなかった。ただそれだけのことなんだよ」

「――」

口調を抑えれば抑えるほど、心の痛みは伝わってしまう。

それは希沙良が相手ならなおのことだ。不安の底に突き落とすだけだ。わかっている。

「……それってまさか……〈妖〉の……」

希沙良の問いに、返ったのは沈黙だった。

十九郎はコートを持ち直し、出口に向けて歩を踏み出した。

「……今日は、悪かったな。もう心配はないから、ふたりとも先に帰ってくれないか。俺は――少し、考えることがあるから」

静かな声だった。亮介でさえ、その響きになにか覚悟に似たものを感じてどきりとするような、そんな声だった。

呼吸を止めたように、希沙良は無言でいた。

ふたりに視線を向けることもせず、十九郎は待合室を横切り、外に出た。追ってくる気配はなかった。

――自分が、ひどく感情的になっていると、気づいてはいた。

気持ちを整理しないと、誰であろうと傷つけてしまいそうで……己の不甲斐なさをさらけだしてしまいそうで、恐ろしくてならない。

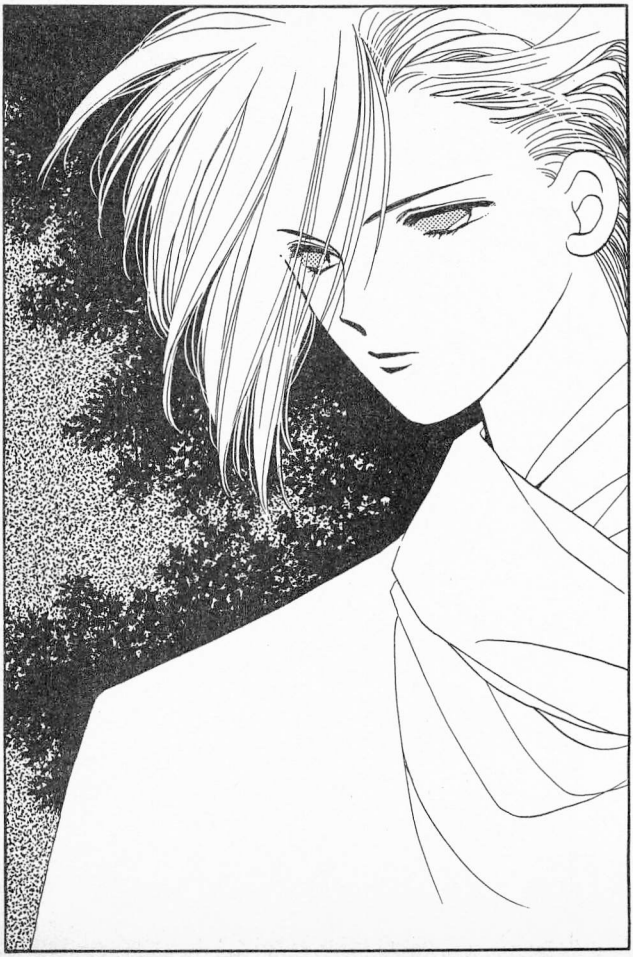
（自惚れだな……）

自嘲の念がこみあげてくる。十九郎は前髪をゆっくりとかきあげた。駐車場をつっきって、誰もいない歩道に出る。病院の塀が延々と続いた。

弱さは、自己過信の裏返しなのだ。

力が欲しい。誰も傷つけずにすむ精神の毅さが欲しい。

生半可な力に自惚れていたりするから、こんな失策にいちいちぐらついている。
そもそも、あの女の幻術に正面から立ち向かったりせず、予感に従って避けていたなら……？
表通りまで、かなりの距離がある。アスファルトに足音がやけに響く。
その時。
「？」
二重に、足音が反響した。
十九郎は足を止めた。顔を上げ、目をこらす。
足音は鳴り続けていた。まっすぐにこちらへ近づいて。
街路樹が重い影を落とす中を、歩み寄ってくる長身——。
「……」
十九郎はその正体を悟り、口許をひきしめた。
闇の中から、彼がその姿を現す。
弱々しい街灯の下、色の淡い瞳が澄みきった光を宿して煌く。すべての生命を超越して立つ若者。
翳を帯びるがゆえに眩しさが際立つ。熱を感じさせぬ、いっそ冷ややかな表情は、その美貌を清らかに彩り他者を惹きつけて離さない。そうだ。彼は人ではないのだから。



転生した神の化身。ただひとり現代に存在する〈空の者〉。
弱冠十九歳にして一族の総帥を任じる。それだけの「力」を有するがこそ。
「今回の件は、報告があって然るべきだな……十九郎」
ごく静かに、彼が口を開いた。
斎伽忍。それが、彼の名前だった。

2　夏江

かなり長いこと、希沙良は黙りこんでいた。

病院は、田園調布寄りに位置している。駅からは中途半端に離れていて、自由が丘、田園調布のいずれに出るにしても、少々歩かなければならない。

黙々と歩く希沙良のあとを、亮介も特に何も言わずついていった。

大人びて物静かな印象ばかりが強かったが、もしかすると十九郎はひどく重いものを抱えているかもしれない、と亮介は思っていた。誰にでも優しくあろうとするために。そして術者としての誇りを守るために。

つい最近になって〈妖の者〉の存在を知ったような亮介と違い、十九郎は生まれたころから一族の一員としての自覚を求められていたのだ。

（努力、したんだ……きっと）

凄いな、と思う。あれだけ誇り高くありながら己の力の敗北を認めて、なお泣きごとのひと

つも言わずに。

「希沙良？」

ふと気づいて、亮介は口を開いた。

「希沙良、道が違う」

声が耳に入らないらしい。

仕方なく、亮介は手をのばした。腕を摑まれて、希沙良がぎくりとして振り返る。

「え……？」

完全に虚を突かれたような表情。

「ごめん……そっちに行ったら、駅と逆だから」

思わず、謝らずにはいられない。

「ああ……そっか……」

まだ現実に戻りきっていない瞳で、希沙良は呟いた。

大きく息をついて、目を上げる。表通りのまじわる交差点。

時折、ヘッドライトが駆け抜けてゆく。

「――そうか、帰るんだよな」

自分に言い聞かせるように繰り返して、希沙良はすとんとガードレールの上に腰をおろした。

「悪い、なんか頭がぐらぐらしてたんだ」
「うん……」
亮介はジャケットのポケットに両手を入れて、小さく頷いた。
希沙良は短く沈黙した。言葉を選んでいるようだった。
「……どう、思うか？　崎谷は……今度の件……」
「――」
とっさには答えかねる。
「……どう、と言っても……」
「十九郎が手も足も出ないような相手なんか、本当にいると思うか？」
重ねて問われて、亮介はようやく納得した。
希沙良がずっと考えていたのはそのことだったのか……。
「……あいつは、水沢とか俺みたいに派手な技を使うわけじゃない。けど、十九郎が本気で守りにまわったら俺なんかまるでかなわない。それこそ崎谷の術力中和でもなきゃ、あの〈結界〉は破れない。それが、本当に負けるなんて……そんな相手がいるとしたら……」
「……」
正直、亮介は返答に困った。
亮介が現実に〈妖の者〉と対峙したのは一度だけである。

つまるところ、〈妖の者〉をはかる基準が、亮介にはない。希沙良の言葉にうまく答えられるはずがなかった。

「やっぱり忍さんに聞くのがいちばんいいと思うけど……」

「あんな奴に泣きつけっていうのか!?」

おそるおそる切り出したら、ギッ、と希沙良に睨まれた。

「泣きつくっていうか……だって、黙ってるわけにもいかないだろ」

「それであいつが何をするって!? ——あんな、人の気持ちなんかまるで考えない奴……」

憤りもあらわに、低く言葉を吐き出す。

(根に持ってるなー……)

亮介は内心嘆息した。前回忍に退けられたことが尾を引いているらしい。

「……俺、まだよく知らないけど」

考えながら、口を開く。そっぽを向いている希沙良の頭を見降ろして。

「〈妖の者〉は術者に目をつけるんだろ。よほど力の差がある時は別だけど、そうでもなきゃしつこくつけ狙うんだろう? とり憑いて、術力を取り込もうとするって……」

そう亮介に語ったのは、ほかならぬ十九郎だった。

「火の粉が降りかかったら、払うしかない。ひとりじゃどうしようもないこともあるけど、協力すればなんとかなるって……里見さんも言っていた」

ふっと希沙良が目を上げた。亮介は続けた。
「あの時は俺が助けてもらった。――今度は里見さんの番かもしれない。しかもそれが凄く強い奴かもしれないなんてことだったら、打てる手は全部打ちたいよ、俺は。自分がちゃんと力を使えない分、余計にそう思う」
「……つまらない意地、張ってんじゃねえよって？」
斜めの角度で見上げながら、希沙良がボソッと言った。
「少なくとも、里見さんのためではあるんじゃないか」
「――」
力が、足りないのだ。
絶対的に術者の数が足りない。諒も冴子も、今東京にはいない。
そうなれば、忍の力を借りるしか道はない。
「ちっ」
舌打ちして、希沙良は勢いよく立ち上がった。
「なんてこった。よりによって崎谷に説教されてるようじゃ、俺も終わってるな」
「すみませんね」
亮介はわざと嫌味に言い返した。ようやく希沙良の毒舌が復活したのだ。
「ああ畜生っ、なんか腹立ってきたな」

ぶん、と栗色の頭を振って希沙良は唸った。
「え？」
「十九郎！　あいつっ、俺のことシカトしやがったじゃんよっ。許さねえぞあの野郎っ」
「……なんかそれって話の次元が……」
眉をひそめる亮介にかまいもせず、希沙良はすたすたと歩き出す。
「帰るのやめた。あんな奴の言うこと聞いてたまるか」
「な、何を突然……」
「あ、そうだ。おまえさんまだつきあえるよな。ちょうどいいから面白い所に連れてってやろう。そうしよう」
ぽん、と手を叩くと勝手にそう決めつけている。
（このあたり誰かと似ている……）
もしかすると自分はこの手の人間に引っぱりまわされる宿命でも背負っているのでは、と、亮介はあまり嬉しくもないことを考えた。

途中の公衆電話で、希沙良は二か所に電話をかけた。
一本目は希沙良の自宅らしかった。相手は多分、年の離れた彼の姉なのだろうが——とびか

う悪口雑言に亮介は圧倒されまくっていた。

とにかくはじめから終わりまで、一貫して喧嘩腰なのだ。

「……知らねえよ。俺に関係ねえって。てめえに言われる筋合いねえだろ？　……何様のつもりだよ、何様の！　てめえこそ親父の金食いつぶしてる張本人だろうがよ！　なにがダイガクインだよ、え？　なーにがブンガクだよ。ただの自己満足だろうが、そんなのさあ、誰のためになるってわけ？　偉そうな顔して食わせてもらえるような身分なの、そっちこそ、へえ？」

要するに、今日は帰りが遅くなると、ただそれだけを言うための電話で口論すること約十五分。

三人姉弟の末っ子だとは聞いていた。七歳上の姉がＯＬで、六歳上の姉が学生だとか。それを話した時の希沙良の表情で、仲はよくないんだろうなと察してはいたが。

（まさかこれほどとは……）

じゃあなっ、と怒鳴って希沙良が受話器を置くまで、傍で聞いている亮介のほうが落ち着かなかった。やれやれと思う。

ピーピーと鳴るテレカをせっかちにもう一度押しこんで、希沙良は二軒目をダイヤルした。コール一回で、相手が出た。

「……夏江さん？　俺」

ひどく素直な声を聞いて、亮介はあまりのギャップに愕然とした。

「今、すぐ近くでさ……そう、あの信号の所。うん。……行っていい？　崎谷も連れてくから。……あ、あいつまだだろ？　やっぱり？　……うん、じゃ、よろしく」

別人のようなおとなしさで、淡々と希沙良が話す。

この変わり身の早さは役者に向いているかもしれない、と亮介は感心した。いや、逆に最も演技に向かない性格かもしれない……。

カードを抜いて、希沙良が振り向いた。

「いいってさ。行こうぜ」

車が来ないのをいいことに、赤信号の横断歩道を先に立って突っきる。亮介はばたばたとそれを追いかけた。

「何？　どこに？」

「あ、だから、十九郎の家」

「は？」

とんきょうな声をあげてしまった。

「なんだよ、変な顔して」

「え……でも、まずくないか？」

「何が」

あっけらかんと言う希沙良に、どう説明したらいいものか、しばし迷う。

「だ、だって、里見さん……先に帰れって……」
「平気平気」
（何がどう平気なんだ？）
先刻の十九郎の様子では、自分たちと顔を合わせたくない、ということは明白だったはずだ。
裏道を通り抜けながら、希沙良が肩をすくめた。
「あの親子をなめたらいかんぜ、崎谷。まあ行ってみりゃわかるけど」
「……？」
裏道を出ると、小綺麗なマンションが目の前だった。門を開け、十階建ての七階までエレベーターで上がる。
設備は整っているが、贅沢な印象は与えない。
ふたりが廊下に踏み込んだ途端、奥から三つ目のドアがするりと開いた。
「いらっしゃい」
活気に満ちた女性が、にっこり笑って、そう言う。
「夏江さんのそういう所、好きだなー」
希沙良がはにかむような笑顔で答えた。
三十代半ばくらいの印象。ふわりとあたたかい表情をする。

小柄で、どちらかと言えば痩せているのに、なにか大きな包容力を感じる。優しげな雰囲気が、どこか十九郎に似ていた。

「崎谷亮介君？」

彼女が、亮介を視線にとらえた。

「あ、はい」

「お話はいろいろ聞いてるわ。会いたかったのよー。入って入って」

小さく手招きすると、ぱたぱたと中に入っていく。

（気さくな人だ……）

ちょっとした感動を覚える。亮介は希沙良の腕をつついた。

「里見さんのお母さん？」

「そ。夏江さんって呼ばないと怒られるぜ」

にやりと笑って、希沙良はドアの内に歩を進めた。いかにも勝手知ったる他人の家、という感じがする。

（あれ……）

ドアを閉めながら、亮介はふと気づいた。

（着くのと同時にドア開けてくれたのって……勘かな？）

彼女ならあり得る。それだけの感覚の鋭さがほの見えるのだ。

そういえば、十九郎たちの祖母は斎伽の純血種だったという。つまり夏江は、希沙良流に言えばハーフということになる。

（感覚が強いわけだ……）

スリッパに履きかえて、のれんをくぐった。ぱっと明るい空気が目の前に広がった。八畳くらいの洋間である。

「座ってて。今、お茶が入るから」

台所から夏江が言う。希沙良はさっさと四人がけの丸テーブルに着いて、脚を組んでいた。洋風の居間に、台所と、ふたつの寝室。全体にさっぱりしている。

亮介は希沙良の隣に腰をおろし、なんとなく部屋を見まわした。

「いかにもだろ」

希沙良が、なにがなし得意げに言った。

「うん。納得する」

亮介もつい笑顔になってしまう。

違和感がないのだ。こういう住居に、夏江と十九郎がふたりで暮らしている光景というのが、ひどく自然に想像出来る。

たいした装飾があるわけでもない。家具も必要最低限に抑えられている。が、カーテンやカーペットの色調は明るく優しくて、さりげなく花が飾られて、空気がやわらかい。

「お待たせ」
銀のトレイにティーセットをのせて、夏江が戻ってきた。ハイネックのセーター。
「今日、お店は？」
カップを受け取りながら、希沙良が訊いた。
「今日はさすがに早く切り上げてきたわよ。ま、小夜子ちゃんにまかせときゃ平気だから」
「この人、店のオーナーなんだぜ。でっかい料亭」
親指で彼女を指して、希沙良は亮介に説明した。
「へえ……」
「十九郎ね、なんかひどい声で電話してきたから、ああ今日は早く終わらせようって決めたのに、またいきなり電話かけて、大丈夫だからかまうなって言うのよ。そんなこと言われたって、こっちはもう全部手配しちゃってるっての」
あざやかな手つきで紅茶を注ぎ、夏江はあっさりと言う。
「あいつ、意地っ張りじゃん」
「まだ修業が足りないわ」
「夏江さんにかかったら、みんなそうだよ」
かなりの事件だったはずなのに、突き放したように語る。そのくせ、それがまったく厳しい響きを持たないのが不思議だった。

「でもね、結局大事にはいたらなかったんだから、それに本人が大丈夫って言ってるんだから、心配ないのよ」

亮介の思いを見透かしたように、夏江が瞳をのぞきこんで、そう言った。

「大丈夫って言ったからには、大丈夫な顔が出来るようになるまで帰ってこないの。あの子はそういう子なの。あたしの子だもの、不様なことはしないわ。それについては絶大な自信を誇っているのよ、あたし」

（うわあ……）

亮介はようやく、希沙良の台詞が腑に落ちた。

（いいなあ、こういうの）

「ご自慢の息子さんだよな」

「希沙良もいい子よ」

「ついでしょ」

「よくわかるわね」

「ちぇーっ」

希沙良が拗ねている。

「……なんか、すごいですね」

うまい言葉が出てこない。とりあえず、素直な感想。

「まかせて。親の期待をしのぐ良い子に育ったわ」
「親バカ……」
Vサインを出す夏江に、希沙良が白けた眼を向けた。
「なによこの子、人のこと言えるの」
くしゃくしゃ、と希沙良の頭をかきまわして、夏江はいたずらっぽい笑い方をした。ケーキがあるのよ、と言いおいて台所に戻っていく。
「いい性格、してるよなー」
ぶちぶちと言いながら、希沙良はテーブルに頬杖をついた。
「迫力がある……」
亮介もぼそっと呟く。カップに手を伸ばした。
「なんか、すごく若くない？」
「……」
こっそり訊いたら、希沙良が意味ありげに身を乗り出した。
「崎谷から見て、ズバリいくつでしょーか」
「え……三十六、七くらい……？」
「おおはずれ」
声をひそめる。



「実は、四十五っ」
「え――っ!?」
思わず叫んだら、希沙良に頭を殴られた。
「バカ、騒ぐな。歳の話すると怒られる」
「……う、うちのより年上……」
なにも殴らずとも、と希沙良を睨み返しながら、亮介は小声で呟いた。
「ただもんじゃないだろ」
「なるほどー……」
実感をこめて頷き、ふと思いついて目を上げる。
「希沙良のは？」
「――」
特に大した意味のある問いではなかった。
だから、それで希沙良が一瞬沈黙した時、そこにはひどい違和感があった。
（あ……）
亮介はどきっとした。希沙良の答えが、読めてしまった。
あいまいな横顔で、希沙良が言う。
「うち、母親死んだから」

「……」

ああそうだったのか、と亮介は苦い気持ちで思い出していた。母親のことを語らなかったのは、そのせいか。

それくらい、思いつけばよかった。あんまり無神経だ。……

「おい」

ごん、ともう一度頭を小突かれた。

「いてっ」

「おっまえねー、露骨に顔に『ごめんなさい』とか書くなよ。それっていちばん嫌味だぜ。口で言うか何も言わんかどっちかにしろ」

「じゃあ、ごめんなさい」

上目遣いに、言い返す。さらに殴られた。

「なんなんだその素直さはっ。馬鹿かおまえはっ」

「言えっつったの希沙良のほうだろっ。どーせ馬鹿だよ俺っ」

「ええいもっと馬鹿にしてやる」

「いてっ。痛いってばっ」

「なーに、じゃれてるの」

夏江がくすくす笑いながら、テーブルについた。

「いつからいじめっ子になったのよ、希沙良」
「ずっとこうだよ俺はっ」
亮介の首をしめていた手を放して、むっと希沙良がふくれてみせた。
「そういうこと言うと、十九郎に言いつけるわよ」
「あんたはそれでも母親ですか」
「言いつけられたくなかったら、このお茶おいしいですねくらい言いなさい」
「まだ飲んでないもん」
まるで駄々っ子である。亮介は首をすくめてチーズケーキの皿を受け取った。
そういえば以前十九郎も、希沙良のことを、子供みたいな奴、と言って呆れていたものだった。亮介とふたりでいる時は、こんな甘え方はまずしないのに。
(……甘え方?)
何の気なしに思った言葉に、ひっかかる。
(そっか、甘えてるのか……)
亮介は深く納得して、紅茶をひと口ふくんだ。
自分と一緒にいる時——というか、十九郎や夏江がいない時の希沙良は、どこか鋭い刃物のような印象を与えて、あまり親しみやすさを覚えない。
多分、家の中でもそうなのだろう、彼は。さっきの電話から、そう思う。

かなり気を張って暮らしているのではないだろうか……。
「なんだよ」
視線に気づいて、希沙良が振り向いた。
「別に」
また殴られてはかなわない。余計なことは言わずにおく。
「言いたいことがあれば言えよな。気持ち悪い」
「希沙良がいじめるから亮介君、おびえてるんじゃないの」
夏江が目を細めて笑った。希沙良がどんとテーブルを叩く。
「根性が足りないっ」
「おびえてないってば！」
必死になって声を張りあげた。
軽くかわそうと思ったのが間違いだった。希沙良の話には正面から対抗しないと、結局いじめられるはめになるらしい。
（やっぱり里見さんって凄いっ）
つくづくそう思う。こういう問題児のフォローを引き受けているなんて、並の人間ではあるまい。
（まあ、それを言ったら夏江さんもそうだけど……）

彼女のほうは、多少希沙良をたきつけて面白がっているふしもあるが。
ふたりの会話を聞いていると、希沙良がことにつけこの家に来ては入りびたっていることがわかる。
まるで、家族の一員のように。
「亮介君は、ひとりっ子？」
しばらく希沙良と軽口を叩いていた夏江が、ふと亮介を向いた。
「あ、はい」
「いかにもそういう顔してる」
小首をかしげて、楽しそうにそう言う。
「え？」
「俺は長男だぞーっ、て主張してるんだけど、でもなんだか可愛い顔」
「はあ……」
前にも誰かにそんなことを言われたような気がする。
「で、結構真面目でしょ。親孝行しなきゃ、とか思ってるでしょ」
「えー？」
亮介は困惑した。そんなふうに見られるとは思わなかった。
「俺だって長男だぜ」

「希沙良はどう見たって末っ子」

「げー」

夏江は亮介について、特にそれ以上突っこんだことは言わなかったが、なにかとても大切なことを言われたようで、亮介は思わず考えこんでしまった。

亮介の両親は、優しい。いつだって亮介に不自由のないように心を配ってやまないほど、優しい。いやむしろ甘い。——信頼は、してくれていないけれど。

（物質面では愛されてるってか……）

亮介は息をついた。それだけでも、自分はかなり恵まれている。それでもう充分、と思いもするのだ。

そういえば、と時計に目をやった。いつの間にか十二時に近い。

これは母親あたりが心配してるな、と亮介は眉をひそめ、それからまったく別のことに気づいた。

十九郎が、遅い。

（いくらなんでも……）

やっぱり自分なんかがいては帰りにくかったりしないだろうか、と亮介は落ち着かない気持ちになった。目の前のふたりはまるで平気な顔をしているが、どうにも……。

「？」

そんなことを考えた矢先。
亮介はハッと目を上げた。
がちゃり、と玄関でノブをまわす音が聞こえた。
「――」
希沙良が立ち上がった。
反射的に亮介はその横顔を見上げた。瞬間、ひどく緊張した思いが読み取れた。病院で十九郎と別れた時に戻ったような。
平気だと、あれだけ言っていたのに。
ドアが閉まり、足音が伝わった。
「ただいま」
深い……微笑。
のれんを上げて、常とまったく変わらない口調で、十九郎が言った。
張りつめた空気は、まるで失せている。
「おかえり」
椅子にかけたまま、夏江が答えた。
「何か食べる?」
「今は要らない。それよりもっと気のきいたものがあるでしょう」

「仕方ないわね、この不良少年。白でいいのね？」
夏江は台所に姿を消す。
希沙良と亮介の存在をはじめから予測していたように、十九郎はまるで違和感を見せない。コートをソファの背に放り出して、当たり前のように亮介の隣の椅子を引く。
「近いうちに、仕切り直しだな。今日の映画は俺も見たかったんだ」
「……本当、間の悪い奴」
希沙良がようやく言葉を吐き出した。どすん、と座りこむ。
十九郎は亮介と目を合わせて、軽く笑った。
「俺としては、こんなわがままにずっとつきあわされた崎谷君に同情を禁じ得ない」
「俺っ、わがままじゃないっ！」
「と言う奴に限って……」
「うんうん」
「崎谷っ、うなずくなっ。十九郎っ、てめえ意地悪だぞっ」
わめきたてる希沙良の隣に、白ワインの瓶を抱えて夏江が戻ってきた。十九郎がグラスを取りに立つ。
「未成年者に飲ませるなんて惜しいくらいの秘蔵品よ」
「何故それをもっと早く出さない……」

希沙良の目の色が変わった。
グラスが回ってきたら、なにかわくわくするようで、亮介も嬉しくなった。ワインなんて飲んだことはなかったけれど。
おちついて、あたたかい、その「場」が嬉しい。
希沙良が入りびたる理由も、わかる気がする。そう思いながら、亮介は乾杯に加わった。
グラスが鳴った。

3　妖女襲来

「で、家に着いたの今朝三時……」
「やだ、大丈夫？」
吊り革に体重を預ける亮介を、心配そうに亜衣がのぞきこんだ。
「うん、そんなに飲まなかったし」
まだ多少頭はぼうっとしているが、亮介は大きく息をついて、気をひきしめた。
隣に立つ神原亜衣は、とりあえず同級生である。とりあえず、というのは単なる同級生ではないということで、しかしその——だからと言って「彼女」とまではさすがに言いきれず、でも、その、なんというか、要するに——とりあえず同級生としか、今は言えないということである。
たまたま家が近所なので、最近は中野駅で待ち合わせて同じ電車で通学しているのだが……これが野郎どもの嫉視の的になることはなはだしかった。このごろはそれにも慣れたが。

ちょっとした美少女なのだ。それも愛敬を振りまくタイプではなくて、どこか颯爽として人を近づけない雰囲気がある。一方亮介は風格やら威厳やらには縁がない人間で、はたから見たらさぞ不釣合だろうなと思う。身長で勝っているのがせめてもの救いだ。

制服は、亮介が詰め襟で、亜衣が紺のブレザー。学校は吉祥寺にあり、私立高陵高校という。

「でもやっぱり、帰ったら母親が起きててさー……」

亮介は肩をすくめた。

「そういうのうるさいんだ、うちって」

「電話の一本くらいしておけばよかったのに」

「うん、なんかうっかりしていて……でも大体、普通の家って、息子がひと晩くらい帰ってこなくたって放っといたりしない？」

「うーん、そうか、崎谷君ひとりっ子だもんね」

亜衣がしみじみと頷いた。彼女は四人兄妹の末娘だという。

「うちなんか、そのへん大雑把になっちゃってるから……親もいい加減いちいち心配したりしないみたい」

「いいなあ、それって」

「それはそれなりに問題あるけどね」

素直に羨んでしまった亮介を、複雑な表情で亜衣は見返した。
「隣の芝生は青いっていうし」
「なるほどねー……」
（そりゃそうだ……）
言われてみればそのとおりである。
（家族なんて、その一員になってみなきゃわかんないこともあるだろうし……）
「それで、里見さんの見た〈妖の者〉って、結局よくわからないの？」
やや声をひそめて、亜衣が尋ねた。亮介は目を上げた。
「うん……まあ、忍さんも調べてくれるらしいから、あんまり心配はないと思うけど」
「でも、なんだか嫌よね……得体が知れない相手だなんて」
不安を隠せない、といった様子で呟く。そういえば前の事件で、彼女はかなり危険な目に遭っている……。
「大丈夫だよ。今度は亜……亜衣ちゃんのほうまでは、連中も近づかないだろうし、そんなことないように俺も気をつけるし」
口ごもりながら精一杯言ったら、思いきり亜衣が顔をしかめた。列車の大きな揺れに押されるように、ぐい、と亮介の目の前に身を寄せる。
「そうじゃないでしょ!?　……あたしが心配してるのは、崎谷君がまた狙われたりしないかっ

て……そういうこと！」

「――」

かあっ、と亮介は赤面した。

「……あ、そ、そうでしたか……」

思わず頭が下がる。

「全然、信用がないんだから」

「す、すみません」

少しはカッコつけてみたかったりもするのに、結局この始末である。

（やれやれ……）

「水沢君がさっさと戻ってくればいいのよね」

亮介の胸中を知ってか知らずか、亜衣がそう言う。

「ガードのプロだものね……連絡、とれないの？」

「うん、一か月くらい前に一度電話があったけど、それっきり」

亮介は深くため息をついた。

「広島にちょっと戻るとかなんとか言ってたんだけど……」

希沙良にも問われたが、本当に現時点で諒の居所はまったく知れないのだ。彼の雇用主たる忍に訊けばいいのだろうが、その忍と連絡をつけることがそもそも至難の技で……。

列車がすっと減速した。吉祥寺のホームにすべりこむ。
「そういえば、あまり関係ないけど」
ドアに向かいながら、亜衣が振り向いた。
「和泉君って、新宿南高？」
「え、希沙良？　そうだけど、言ったっけ？」
「あ、中学の時の友達が南高に行ってるの」
どん、と人に背を押されてホームに降り立つ。
階段の途中でようやく肩を並べた。
「偶然、その子の話にキサラ君って出てきたから、問いただしてみたの。そしたら、やっぱり本人みたいだし」
「確かに、滅多にない名前ではある……」
「で……」
少し、言いにくそうにして、亜衣は言葉を継いだ。
「――なんか、和泉君って、その子が言うには……凄いプレイボーイだって……」
「わかる気がするっっ」
思わず両手を握りしめて、亮介は力説してしまった。

同日同刻。

噂の主こと和泉希沙良は、教室の窓際で手すりにもたれていた。

クラスメートの雑談になんとなく耳を傾けて、きれいに晴れ上がった空を眺める。くそ面白くもない。

答案返却日、というのがそもそも気に入らない。なにせ科目の好き嫌いが激しいから、悪い試験はとことん悪い。それをネタに、父親あたりがガタガタ言うのだ、どうせ。

それに、クラスの雰囲気がどうにも気に入らない。今日と終業式がすめばクラス替えだというので、みんなして妙に「お名残惜しいムード」に浸っている。べたべたしている。

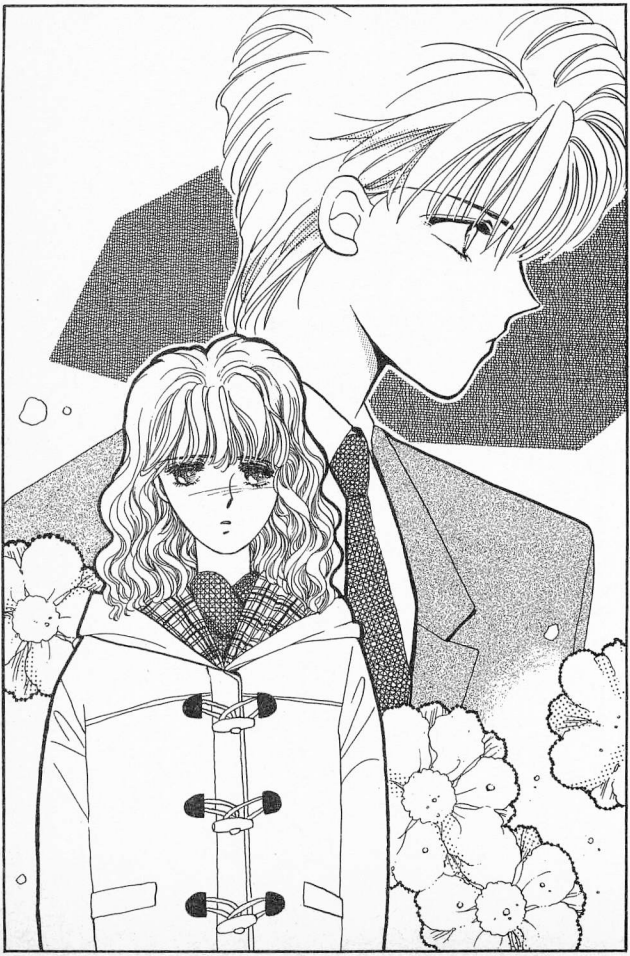
（やめんか、カッコ悪いっ）

さっさと卒業してやりたい、と思う。制服からしてセンスがないのだ、この学校は。何が悲しくて緑のブレザーにグレイのズボンなど、三年間も着続けねばならないのか。

がらり、と教室の後ろのドアが開いた。何の気なしに目をやって、希沙良はちっと舌打ちした。

目が合ってしまって、ぎくりと少女は肩を震わせた。希沙良はついと視線をそらす。

ふわふわした髪をダッフルコートの肩まで伸ばした彼女は、ドアの所で凍りついたように立ちつくしている。



「晶子？」
面倒見の良さそうな友人たちが彼女を囲んだ。うつむくその肩を抱えるようにして、廊下に出て行く。
泣いていた……かもしれない。
（弱いんだよ……）
希沙良は苛立ちを隠さず、ドアに背を向けた。
どうしてこんなことで泣けるのか、まったくわからない。とっくに終わったことだろうに。よりによって同じクラスだから始末が悪い。
「泣いてんじゃん、和泉」
すぐ脇で雑談していたふたりが、気遣わしげに振り向いた。
「……もう関係ねえよ。俺のせいにするなよ」
むっ、として言い返す。
「関係ないって……おまえ、終わったって本当なわけ？」
テニス部の牧野が責めるように尋ねた。隣でバレー部の岡が目を円くする。
「なに八木沢さん、マジで振っちゃったのか？　勿体ねー……」
「――」
わかったようなことを言う、と希沙良は不機嫌になった。

テニス部の連中は、まず間違いなく彼女の肩を持つだろう、と思いもする。八木沢晶子は軟式テニス部に所属している。

隣のコートから駆けてきてはタオルだドリンクだと差し出す姿は、一生懸命で、献身的ですらあった。繊細で、ちょっと触れただけで壊れそうで——テニス部の男たちには、あんなけなげな子を独り占めしやがって、と散々恨まれたものだった。牧野もそのうちのひとりだ。

「……別に、嫌いだなんて思ったことねえよ」

ポツリと言った。

「泥沼だからやめろっつっただけだ」

「でもおまえ」

「面倒くさいの嫌なんだよ！」

言いかける牧野をさえぎって、希沙良は強い口調で切り捨てた。

……そうだ、決して嫌いではなかったのだ。

希沙良は振り切るように髪を揺らし、校庭に目をやった。生まれつき茶色がかった髪が陽光に透けて、ますます薄い色になる。

その髪や、勝ち気な瞳や、すっきりと整った顔にきっぱりした言動が加わって、昔からやたらと異性に人気が高かった。それこそ小学生のころから、周囲に女性の絶えたことがない。その分同性には敵が多いが。

しかし、いわゆる男女交際は長続きしたためしがなかった。
もって三か月。晶子とは十二月につきあいはじめたのだから、かなり続いたほうなのだ。
「春からずっと、好きでした」
そう、晶子は言ったのだった。その言葉に妙に感心したのを憶えている。どうしたらいつまでも、同じ想いをひきずれるのだろう、と。
特に大した人間でもない自分に深く深く思いつめて——誰よりもただひとり「特別」だなんて。
そんなことは、自分には言えない。
そんなふうには想えない。
……決して嫌いではなかったけれど。
だから、もうやめろと言った。もうかまうなと言った。献身を束縛と感じはじめた時、そうするしかないと思った。
拘束が苦痛になったら、一緒にいる意味もない。
希沙良はパイプの手すりに体重をかけて、かすかに目を細めた。結局いつもいつも、同じことの繰り返しだ。
予鈴が鳴りはじめる。
「？」

狭い校庭には、誰も出ていない、はずだ。希沙良は目をこらした。なにかがおかしい……。
暖房が効きすぎるので、窓は開いている。姿勢を正し、下を見降ろして、希沙良は眉をひそめた。人影はない。
（気のせいか？）
教室は四階にある。
違和感は消えぬまま、希沙良は手すりから離れ、自分の席に視線を転じた。――
「!!」
振り向いたのは、完全に反射的な行動だった。
（しまった！）
結界を張る間もなかった。目に見えぬ衝撃を、希沙良はもろに胸に受けた。
「ぐっ……」
胸郭をハンマーで殴られたように息が詰まる。目の前が暗くなる。
それがぶちあたる直前、希沙良は確かに見た。
校庭にひとりぼつりと立ち、手をかざすようにした女の姿。その女の掌から放射された、強烈な妖気。
呼吸が出来ない。ひどい悪感が背筋を走り、吐き気が襲った。――何もわからなくなる。
「和泉!?」

誰かが叫んだのが、最後に聞こえた。
狙撃されたような唐突さで、希沙良は教室の床に倒れた。十九郎に知らせないと、という呟きは掠れて、誰の耳にも届かなかった。

……ああ、また倒れたのかな、とぼんやり思った。
どこかに運ばれていくのを感じる。なんとなく移動していることはわかるが、目が開かない。すう、とまた意識が沈んでいく。混沌の内に。
そうだ、小さいころは……昔は、よく貧血を起こして倒れていたのだ。あれはどうして治ったんだっけ？
とうに忘れていたようなことを、掘り起こす問いかけ。
希沙良、希沙良……いい名前をもらったわね、と微笑む夏江の姿。
いやだ、嫌いだよこんな名前……。
そう言いたくて、でも言えなくて、口ごもっていた幼い自分。
おまえだけ、おまえだけ母さんの名前をもらって、力をもらって、命まで奪ったんだ、と言って自分を見た姉の瞳。憎悪の光。
そんなこと、自分で選んだわけじゃない。

言いたかったのに、言葉が出なかった。そんな時、がたがたと体が震えた。視界が回り、頭がぐらついた。

小学校のころは、それをずっと繰り返していた。すぐに気分が悪くなって、ベッドに運ばれて。

〈妖の者〉の妖気にあたったなんて、嘘だ。そこまで強い感覚は持ち合わせていなかった。大人たちは大人の理屈で納得したけれど。

十九郎だけが違っていたのだ。

誰より近い位置にいた術者。彼には、妖気の毒と貧血がまるで関係ないことなど、すぐにわかってしまっただろう。本当に感覚が強すぎて、めまいを起こしてばかりいたのは彼のほうだったのだから。

無理をするな、とも心をごまかすな、とも彼は言わなかった。

今の希沙良になら、あのころの自分があまりに心を抑えすぎて、言葉を呑みこみすぎて、それが反動を生んでいたのだろう、という見当もつく。当時十九郎はそれを悟っていたかもしれない。しかし。

大好きだよ。

十九郎は、そう言っただけだった。

俺は希沙良のことが大好きだから、何を言っても嫌いにならないよ。

希沙良が九歳の時のことだ。もう、記憶の底に眠るほどに遠い時間……。

「亮介ちゃんっ」

教室のドアがいきなりすさまじい勢いで開き、クラスじゅうがぎょっとして振り向いた。

答案返却日、二時間目の最中である。古典の女教師もぽかんとして後ろのドアを見つめている。

「さ、冴子さん……？」

亮介は思わず呟き、反射的に立ち上がった。

ひどく必死な表情でとびこんできたセーラー服の少女は、まっすぐに亮介を視線にとらえた。拳を握りしめて、叫ぶように言う。

「ごめんなさい亮介ちゃん、ちょっと一緒に来て！　大急ぎなの！」

亮介は椅子を引いた。亜衣の席に目をやる。心得て、亜衣が小さく頷いた。

なにか尋常でないことが起きたとしか思えない。

教師に断りもせず、亮介は教室を横切って廊下に出た。ドアを閉めて冴子と対面する。

「どうしたの!?」

真紅の花のような艶やかさ。彼女と会うこと自体、本当に久し振りなのだ。

「病院につきあって。亮介ちゃんの力を借りるかもしれない」
青ざめた顔で早口に答え、冴子は先に立って廊下を走り出した。
「病院!?」
「希沙良君、重体らしいの。さっき救急車で運ばれて……」
「希沙良が!?　なんで!?」
亮介も顔色を変えた。冴子に並んで、階段を駆けおりる。
「〈妖の者〉の仕業としか考えられないでしょ？」
硬い口ぶりで冴子が言い返す。ウェーブの長髪がひるがえる。
（希沙良が、そんな……）
もどかしく階段を降りながら、亮介は唇を噛んだ。
いったい、どういう相手なのか。昨日は十九郎、今日は希沙良と次々に潰しにかかってきている。希沙良が力負けするなんて――。
「俺の力なんか、使い道あるの!?」
二階の踊り場で、声を張り上げた。
「行ってみたらわかるから」
振り向きもせず、冴子が言う。
（……？）

あれ、と亮介は胸中で呟いた。

（なんか……）

なんとも説明のしようがないが、なにかがひっかかる。

「冴子さんは、今までどうしてたの？　諒は？」

わからないまま、重ねて訊いた。

階段が終わり、昇降口が見えてくる。冴子は答えない。

「……!?」

廊下の途中。何かが亮介の足を止めた。漠然と……大きな不安。

先に走る冴子がそれに気づいて、振り向いた。――にやりと笑って。

「どうしたのよ、亮介ちゃん」

亮介ははっきりと異変を悟った。息を呑み、冴子の瞳を見つめ返す。

燃えさかる炎を思わせる美貌は……間違いなく冴子のものだ。けれど、何かが違う。瞳の持つ色が違う。表情の伝える品格が違う。

「冴子、さん？　……」

亮介は一歩下がった。身体がこわばり、緊張がじりじりと足元からはい上がってくる。

「大急ぎって、言ったのに……」

ゆうらりと冴子が言った。意味など持たぬ台詞だった。口許には、まぎれもない嘲笑。

「！」

冴子は動かず、無形の力が亮介を襲った。

がん、と左肩から壁に叩きつけられる。凄い力だ。骨に伝わる痛みに、亮介は歯を食いしばった。

「誰だ!?」

体の自由がきかない。壁にぎりぎりと押さえこまれながら、亮介は叫んだ。

くくく、と冴子が喉を鳴らした。

4　再会

英語の参考書を開いた途端、電話が鳴った。
十九郎は机を離れ、私室を出た。居間の窓際で受話器を取る。
「もしもし？　……そうです、里見ですが」
夏江は朝から店に出かけている。
「え!?　どういうことです」
知らず、大声で訊き返していた。眼が険しくなる。
相手は希沙良の学校の保健医だった。何度希沙良の自宅に電話しても通じないので、という。里見家は連絡先になっているのだ。
「病院は？」
十九郎は手を伸ばしてメモを引き寄せ、さらさらとペンを走らせた。
意識不明だなどと……誰の仕業か知れたようなものだ。受話器を降ろすと、十九郎はメモを

むしりとった。
（よくも……）
ブルゾンを肩から掛け、夏江に伝言を残して家を出る。
（あの女）
エレベーターを降りるころには確信していた。あの女は、気紛れで自分を術にはめようとした訳ではないのだ。意図的に術者を潰しにかかっている。自分ひとりのことと思っているうちはまだよかったが、標的が広がっているなら話は別だ。
いくらでも怒りを発動出来る。
「――」
門を出ていくらも歩かず、十九郎は立ち止まった。敵意に満ちた瞳を左後方に向ける。
「つれないではないか」
やんわりと、笑みを含んだ声。
美しい能面。
音楽が聞こえる。まとわりつく空気の震動。
昨日と変わらぬ姿で、変わらぬ表情で、女は立っていた。
「何者だ」
昨日と同じ問いを繰り返す。

周囲に人の姿はない。結界を張ったのかもしれない。
「皓は光」
透きとおるような声で女は言った。いや、歌った。
「光は闇の内にありてこそ皓となりせば……我、恒久の闇に導く者。導く光」
まるでアリアのように。
十九郎は意識をぎりぎりで保った。有無を言わせぬ誘惑がそこにある。
(皓……?)
ギリシア神話の、サイレンだ。歌声で人を惑わせ破滅に導く魔女だ。魅入られた者には死が待ち受ける。
くらり、と視界が揺れた。十九郎は頭を振った。ありもしない幻影が目の前をちらつく。
ずっしりと重くなる腕を持ち上げ、指を構えた。
「ナウマク・サンマンダ・ボダナン・ドバンシャナン、アビュダラ・ニサトバダトン・ソワカ」
!?
初めて、女の表情が変わった。
「オン・ジ・シリシュロタビジャエイ・ソワカ、臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前!」
ばん、と空気の壁が割れた。女の声が消えた。
氷のように澄んだ眼を見開いて、女は十九郎を見つめた。

驚愕は一瞬。じわじわと口許に笑みが甦る。明らかな好奇心をたたえて。

「おもしろい……」

答えず、十九郎は女を見返した。身構えたまま、肩で大きく息をつく。

まだだ、まだ力が及ばない……相手の力を封じるには至らない。

（どうする？）

逃げる手段を講じるべきだと、わかってはいる。勝てる目算がなければ、戦うべきではない。それは定石だ。

しかし――。

何か、手がかりが欲しい。そう思う心が十九郎をためらわせた。この技を破る鍵が必要だった。今なら確かめられるかもしれない。

わずかな迷いが、隙になった。

どし、と圧力がかかった。全身が重くなり、力が失せる。

「！」

堪えようとして……出来なかった。がく、と左の膝が地面についた。

女は玩具を楽しむような目を十九郎に向け、青白い腕を静かに上げた。妖気の波動が渦を巻いた。

耳鳴りがひどい。片手をついて、十九郎は体を支えた。ぐるぐると女のまわりを幻覚が飛ん

でいた。波動が、体に浸透してゆく。風のようにすりぬけてゆく。

女は、全力を出しきってはいないはずだ。

それをわかりながら、為す術がない。汗が頬を伝わって落ち、目がかすんだ。十九郎はぎっ、と奥歯を鳴らした。

(……この波動？　……)

はっきりしない思考の片隅でぼんやりと感じる。

どう表せばいいのか思い出せない。しかし、確かに知っている感覚。

(そうだ、憶えている)

そう思うとほぼ同時に、腕が力を失った。前のめりに崩れ落ちそうになる。

――その肩が、すっと伸びた手に支えられた。

幻影の悲鳴。

前触れもなく、波動が断ち切られる。

現実世界が戻ってきた。女が信じられないという顔を見せた。克明な、恐怖の色。

「失せろ」

十九郎を引き起こしながら、斎伽忍は短く言った。

女の反応は早かった。何も問わず、不意に跳躍して姿を消す。忍はそれを見送りもしなかった。



何もなかったように、十九郎を振り向く。
「手を出しても、かまわなかっただろうな」
「……はい」
額を濡らす汗を拭って、十九郎は頷いた。かなりの消耗があった。
美しい若者はそれを見降ろし、かすかに表情をやわらげた。
「陀羅尼を使うとは、珍しいな」
「独学です……集中する暗示になればと。まだ駄目です」
では忍は、自分が女の結界を一度破った時点から見ていたのだ。十九郎は苦いものを胸に感じた。
「十九郎、言いたいことはわかるな？」
鋼のような厳しさが言葉の内にこもっている。
叱責されてもおかしくなかった。冷静さを欠き、引き際を誤ったのは明白だった。
「わかっています」
「悪い癖だ」
寒風に吹き上げられるマフラーを指で押さえ、忍はポツリと言った。それ以上は語らず、やや離れて停めたフェアレディZに足を向ける。
十九郎は大きく深呼吸して、顔を上げた。

「行くよ」
漆黒の髪を風になぶらせ、忍がドアを開く。
そうだ、病院へ行かねばならないのだ。何故か忍にはそういった事情がすべて伝わっている。いつもそうだった。
「皆、と名乗ったな」
十九郎が助手席に乗り込むと、忍が呟くように言った。
「そうです」
「正体は知れている」
忍の言葉に、エンジン音が重なる。
「妖者三忌将のひとりだ」

ぎしぎしと体じゅうの骨が悲鳴をあげている。
亮介は壁に貼りつく右腕に渾身の力をこめた。叩きつけられた衝撃で眼鏡のつるは折れ、床に落ちている。感覚を抑制していた眼鏡が失われると、強烈な妖気が空間を占めていることがわかった。
目の前にいるのは、冴子ではないのだ。

それはもう、間違いない事実だった。が、考えたくもない不安が残る。——その身体は冴子のものではないのか？

術者が洗脳されることもある。憑依されることすら。

（まさか）

亮介は必死にその想像を打ち消しにかかった。そんなことを冴子が許すはずがない。そんなことはあってはならない。

が、その迷いが生まれた時点で亮介の能力は封じられたも同じだった。もともと自分の意志では制御の出来ない力……「術力中和」。わずかなためらいでもあれば、それは発現しない。

冴子がふわりと右手を揺らした。淡く光る「剣」がその手に握られた。

つ、と歩を進めて亮介に近づく。

「ちょっと！　悪趣味な真似、やめてくれない!?」

突然、昇降口のほうから鋭い声がとんだ。

冴子は振り向き、いまいましげに舌打ちした。

冴子がもうひとり、そこに立っている。

セーラー服も、背中までかかる長い髪も、まったく同じだ。しかし全身にみなぎるエナジーがまるで違う。

「亮介ちゃんをいじめたら許さないからね」

射るような視線をにせ冴子に向け、彼女は言い放った。
（もう少し言いようがあるんじゃ……）
ほっとしつつ、亮介はひそかに宙を仰いだ。唐突に金縛りが解けて、壁づたいに座りこむ。
ふたりの冴子は、無言で見つめ合った。しばしの間視線を闘わせる。
一方は剣を持ち、一方は空手。
しかし、格が違いすぎた。何もせずとも、立っているだけで、冴子のオーラがにせ冴子のオーラを圧倒している。
にせ冴子の姿が、急にぼやけた。壊れたブラウン管の画像のようにぐにゃりと歪んだと思うと、その奥に、まるで見知らぬ女の顔が見えた。髪を短く切り揃えた若い女。
幻覚を自分の身に重ねていたのだろう。
「小癪な……！」
そう言い捨てて、女は窓へ跳んだ。がしゃん、と割ってとび出す。
冷たい空気がどっと入ってきた。
「……非常識な奴よね」
砕けたガラスを見やって冴子は眉をひそめた。
亮介は立ち上がり、眼鏡を拾った。冴子に近づく。
「冴子さん」

訊きたいことがたくさんあって、口を開こうとしたら。
「亮介ちゃーん、恐かったあっ」
がし、と冴子がいきなり抱きついてきた。
「えー!?」
慌てふためいて聞き返す。
「だってあたし結界張ったりするの苦手だし、剣なんか相手に出来ないし、本当にどうしようかと思った。ああよかったー」
「う、嘘でしょー?」
「嘘じゃないってばっ。必死でハッタリかましてたんだからっ」
「う、うわー……」
かたかたと冴子の手が震えていて、亮介もいまさらながらぞっとした。知らぬが仏とはこのことか。
「でも冴子さん、本当にすごく力を感じたけどな……」
「だからハッタリだってば、ハッタリ」
ほう、と息をついて、強い調子でそう言う。
(そうかなー?)
亮介は首をかしげた。オーラからは、本人が言うよりずっと強大な力が感じられたのに。

（自分で思ってるより強いんじゃないのかなあ……）

「……と、いつまでもここにいるのはまずいわね。行きましょ、亮介ちゃん」

冴子が亮介の腕を引き、言った。

「このガラス、責任とらされたくないでしょ」

「うわ。本当だ」

「それに病院に行かなきゃならないのよ」

小走りになりながら、冴子は昇降口へ向かう。亮介は顔を曇らせた。

「病院!?　じゃあ本当なの？　希沙良が……」

「知ってたの？　あたしもついさっき東京駅に着いて、忍様に電話して聞いたんだけど」

高陵を経由して病院へ向かえ、との指示を、その電話で受けたのだという。

「来てみたら亮介ちゃんが狙われてるし、とんでもない日だわね」

校門の脇にタクシーが待っていた。勢いよく乗り込んで、冴子はぼやくように言った。車が走り出す。

「忍さんって、何もかも読んでるのかな……」

亮介は感嘆の意をこめて呟いた。

忍が冴子を差し向けてくれなかったら、今ごろどうなっていたかわからない。

「そうね……あの人は、はかり知れない人だから」

なにか思うところがあるのか、冴子の表情に陰が含まれた。ほんの一瞬のことではあったが……。

（？）

気になったが、特に問うことはしなかった。

「冴子さん……諒は？」

「冴子さん？」

ぎっ、と冴子が目を上げた。はたと亮介は口許を押さえた。

「……亮介ちゃん、冷たい」

「あ、ご、ごめんなさい、すみませんっ」

前回、冴子ちゃんって呼ばなかったら泣くわよ、と脅されたことを失念していた。ちなみに（どうでもいいが）この脅し方は水沢諒の手口と酷似している。

「亮介ちゃん、それずっとあのニセモノにも言ってたでしょ」

「……う、うん」

「で、冴子さんって呼ばれてあたしが黙ってるわけないとか……気づかなかったのね、要するに」

「……」

「さいてー。あたしに対する亮介ちゃんの認識ってその程度なのね。よくわかったわ。いいん

だいいんだ」
「わあっ。ごめんなさいっ」
背中を向けてしまう冴子を、亮介は必死に引きとめた。
なんといっても、約四か月ぶりの再会である。少しくらい勘が戻っていなくても仕方ないではないか。
――くすくす、と冴子が小さく笑った。
振り向いて、にっこりと微笑む。
「変わってないわね、亮介ちゃん」
「……」
本当に……懐かしい。暖かい気持ちになって、亮介は笑みを返した。
「冴子ちゃんも」
「どうも。諒もね、相変わらずよ」
まあ、あれは成長してないっていうのね、と冴子はつけ足した。
「あいつ、東京には来てないの？」
亮介はやや心配になりながら尋ねた。
肩をすくめたのが、冴子の返答だった。
「残念ながら、あたしもよく知らないの。一か月くらい前に一度広島に戻ったんだけど、その

後どうしてるかさっぱり」

「じゃ、俺と同じ……」

「忍様に訊いても教えてくれなかったし」

ため息まじりに冴子が言う。

それでは完全に行方不明と変わらない。

(それはないよなあ……)

亮介は膝の上に頬杖をついた。ずっしりと不安が胃のあたりにのしかかった。

希沙良の病室はひとり部屋だった。昏倒した原因がまるでわからないので、病院としてはかなり重く見たらしい。もののしい点滴やら脳波測定器などが並び看護婦がしっかり居座っていたが、それをなんとか追い出して、冴子は妖気の毒を除きにかかった。

亮介は廊下で、なんとなく場をもてあましていた。もうひとりの付添人のせいだ。

八木沢晶子、とその少女は名乗った。

お嬢さんぽくて、物静かな子だった。ふわっとして可愛くて、なにか——すぐに傷つきそうで。

(希沙良の相手なんて……大変そうだなあ)

つい心配してしまう。確かに並んだら絵になりそうなふたりではあるけれど。あの希沙良が女の子に優しくしたりするのか、と思うとどうにも妙な感じだ。想像がつかない。

「あの、もう心配ないと思うんで……」

何を話していいかわからないが、とりあえず安心してほしかった。

「あ……はい」

こくりと彼女は頷いた。ひどく胸を痛めている様子が伝わる。

いじらしい、というのだろうか。真剣なんだ、と亮介は彼女を見返した。

がちゃり、とすぐ前のドアが鳴った。

「もういいわよ」

ドアを開いて、冴子がウインクした。そうして部屋の中に姿を消す。それに続いて病室に入ると、大きな窓がまず目に入った。

「……って！……」

ベッドに横たわったまま、希沙良は右手で額を押さえていた。

頭痛が残っているらしく、顔をしかめて呟く。

「ちょっとお姫さん……まだ全然治ってないぜ……」

「それくらいの頭痛は仕方ないの！　時間がたてば消えるわよ」

「アフターケアがなってない……」
ぐしゃっと前髪をかきあげ、希沙良は上半身を起こした。つつつ、と呻いて体を折り曲げる。かなり苦しそうだ。
「大丈夫か？」
「あー……死ぬかと思った」
亮介の問いにオーバーな答えを返して、希沙良はそろそろと顔を上げた。
その表情が、不意に厳しいものになった。
「――何してんだよ」
希沙良の視線が隣の晶子に向いているのに気づいて、亮介はぎょっとした。
「心配だったから……」
必死な声で、晶子が答える。叩きつけるように希沙良が言った。
「こっちの迷惑くらい考えろ。帰れ」
「――」
亮介は思わず口をはさみそうになった。冴子の目に止められる。
いくらなんでも、あまりに露骨だ……。聞いたこともないような冷たい響き。
晶子が細い肩を震わせて、うつむいた。
希沙良は前髪を押さえるようにして、膝の毛布に顔を沈めた。激しすぎる頭痛。吐き気すら

誘発している。
助けてくれ、と言いたくなる——。
ばん、とドアが開いた。希沙良は目を上げた。
「希沙良……」
十九郎の姿が、そこにあった。
知らず、深い息をついて、希沙良は低く呟いていた。
「遅いよ、おまえ……」
「……」
何か言いかけて、十九郎は視線を転じた。
晶子が、部屋を駆け出すところだった。横をすりぬけざま、一瞬だけ目が合った。
まったく知らない少女。涙……。
亮介がそれを追って出て行く。
様々な思いの統合されない表情で、希沙良はそれを見送った。

5　宿命

斎伽忍は窓を背にして立ち、その病室に集まった術者たちを一瞥した。
窓のカーテンは閉じられている。
忍はスーツ姿だった。上着は脱ぎ、白のシャツに茶系のベスト。すらりと伸びた長身がいっそうすっきりと見え、軽く腕を組んだその姿勢はそのままで一枚の絵になる。以前会った時より凛然とした印象が強まったようだ、と亮介は思った。
美しすぎる身体に宿る、まぎれもない神格。
近寄りがたい厳しさが伝わり、それが少し残念だった。彼が笑みを見せぬせいだと、わかっている。
もっとも、今は亮介にしても、そう簡単に笑えるような心理状態ではなかった。
（希沙良のこと、嫌いじゃないけど……）
複雑な思いで、ベッドの上に座る希沙良に目をやる。

（ああいうのって、良くないよ……）

他人事に口を出すな、と言われたらそれまでだが。

初めから傷つけることを目的にしたような言動。例え顔を見たくないにしても、それはそれなりに、誠意のある対応が出来るはずだ。

晶子のことを、どう言って慰めたらいいのかわからなかった。追いかけたけれど、涙を見たら何も言えなくて。きっと口を開いたら希沙良を非難してしまう。そんなもの、晶子も亮介も聞きたくないのに。

それとも、自分がただお節介なのだろうか。

「まず、話を整理しよう」

硬質の声で、忍が口を切った。

「今朝の八時半ごろ、希沙良が女を見ている。そうだな？」

「――」

無言のまま希沙良が頷く。その表情には疲労の影が濃い……。

「女の使った技は多分、『波妖気』だ。特に感覚の強い術者に対して有効な方法だな。妖気の塊を叩きつけられたら、普通の人間でも倒れかねない」

忍の台詞に亮介はぞっとした。この内で最も感覚の弱い希沙良が昏倒し、これだけ苦痛を引きずっているということは――他の者が襲われた時のことを考えるのが怖い。

「希沙良、女の容姿を説明してくれ。憶えているだけでいい」
「……若い女だ。二十歳くらいに見えた」
顔をしかめ、希沙良は低く答えた。
「こう……髪を束ねてて、で、あんまり女っぽくない感じがした」
その言葉に十九郎がふと眉をひそめた。
「予想が外れたな、十九郎。皓とは別人だ」
視線を転じ、忍が静かに言う。
「部下、ですか」
「おそらくそうだ。——それから、代わり身を使う女が高陵に現れたのが十時ごろだな」
「あ、はい」
亮介は背筋を伸ばした。
「……えっと、いま希沙良が言ったのと似たような感じの……」
「待って。あの女、確か髪はショートボブだったはずよ」
冴子が思い出したように口をはさむ。
「で、ジーンズを着てて、身が軽くて」
「……ほぼ同時刻に、十九郎は昨日の女に会っている。つまり総勢三人だな」
髪を揺らし、考えこむようにうつむいて忍が呟く。彼にしては珍しいことだった。

決意を必要とする何かが彼の内にあるのだ。
ごく短い空白にそれは留まった。
「わかった。僕の考えを言おう」
顔を上げる。落ち着いた声音。
「今までのことは奴らの宣戦布告だ。連中は、ここにいる術者全員を抹消しようとしている。無計画な相手なら守りにまわってもいいが、今回は場合が違う。――ならば、攻めに出る」
冴子と十九郎が同時に息を呑んだ。
簡潔すぎる言葉からは、殺気めいた意図すら伝わる。
「相手のことはわかっている。はっきり言っておくが、〈妖の者〉の内でも最強クラスの女だ。更にその腹心ふたり」
亮介は目を瞠った。そんな相手だとは思ってもみなかった。
忍は四人の顔を見渡し、しばしの間を置いた。
やがて、昔語りでもするように、あっさりと言葉を続ける。
「九百年の昔に終結したあの大戦は、斎伽の一族に生まれた〈空の者〉『九那妃』が一族を裏切り〈妖の者〉の総帥に君臨したことに端を発している。つまり、〈妖の者〉の首領は本来〈空の者〉であった女なんだ。そして九那妃の下には、将軍と呼ばれる最高幹部が八人、名を連ねていた。うち五将は前の大戦にて封じられ、三将が逃れたという。その名を『勝呂』『剋

司』『皓』と伝えられる。……皓は人心を惑わし闇へ導いたとされる女だ」

「……」

亮介にとっては、初めて聞くことばかりだった。

隣の冴子を見ると、彼女もどこか愕然とした様子で忍に目を向けている。いや、希沙良も——十九郎も。

それは今まで語られることのなかった伝説ではないのか。

忍だけが胸中に秘めつづけて……。

「皓、という字は月光の如き清明な白さを表す。皮肉な名だな」

ようやく忍の瞳に笑みが宿った。ただし、残忍な光とともに。

「因縁はそういうことだ。……あとはこちらの想像に過ぎないが、前に倒された『蟬里』は、あるいは皓の配下に属する者だったのかもしれない。術者の集団についての情報が蟬里から流れたとすれば、話は合う」

「……成程」

険しい表情になって、十九郎が呟いた。

口許に右手を上げて、何か深く考えている。

「以上はあくまで僕の考えだ。攻めに出ることを望まない者は、今のうちにそう言って欲しい。皆に危険を強要する気はない」



忍の台詞に、返る声はなかった。
どんなに相手が強大であろうと、撃退しないことには平穏は戻らない。結局、打って出るしかないのだ。
不安はあまりに大きいけれど。
「斎伽さん」
ポツリと十九郎が言った。ぎょっとして三人が目を上げた。
「降りるのか？」
穏やかに忍が問い返す。
「いえ、そうではなくて……そうではなくて、考えたことがあるんです」
慎重な声で十九郎は続けた。視線を斜めに床に落とし、思考をまとめようとしている。
ゆっくりと、顔を上げた。
「……攻めに回るなら、まず猫の首に鈴をつけなければどうにもならない。そうですね？」
「そうだな」
感情をうかがわせない、忍の返事。十九郎が言を継ぐ。
「皓は俺に興味を持っています。その執着をうまく利用すれば……」
「!!　十九郎！」
その意図を悟って希沙良が鋭い声を発した。

「……囮に、なるか？」
忍の言葉は質問ではなく、確認だった。
十九郎が無言で頷く。
「駄目だ、俺は反対だ！」
ベッドを殴り、すかさず希沙良が怒鳴った。怒りにその拳が震えている。
「ずいぶん勝手じゃないか！　狙われたことを言うなら俺だってそうだろうが！　何の権利があってそんなことを決めてんだよ、ひとりで！　おまえひとりで!!」
「――」
十九郎は痛みを含んだ眼で振り向いた。低い声。
「……無理だ。希沙良には向かない」
「力なら俺のほうが上だ!!」
切り返した希沙良の台詞は、かなり強引なものだった。亮介はぎくりとして十九郎を見やった。
「力の強さじゃない。問題は質だ」
怒りもせず、十九郎が答えた。希沙良が凍りつき、言葉を詰まらせる。
「十九郎が正しい」
無情に響いたのは忍の声だった。上着を取り、ドアへ向かう。

「検討してみよう。今夜、連絡する」
「わかりました」
十九郎の返事を背で受けて、忍はドアを開いた。
「忍様！」
冴子の声が、それを引き止めた。
呼んでしまった、のだ。本来の冴子なら、そんなことはしていない。
「忍様、どうして諒のことは全然」
「冴子」
言いかけた言葉を遮って忍が振り返る。
何者をも容れぬ深淵。
「その名前をむやみに出さないように。いいね」

「出て行け！　勝手にしろ！」
忍が消えた途端、ぎらぎらした瞳を十九郎に向けて、希沙良が怒鳴った。
「……」
特に何も言わず、十九郎はそれに従った。気遣わしげに見上げる亮介の肩に、促すように手

を置いて。冴子が無言でふたりに続いた。
廊下に出ると、十九郎は壁際のベンチに腰をおろした。
「……久々に、手加減なしで怒らせちゃったな」
苦笑に似た表情を亮介に向ける。亮介はどう答えていいかわからなくて、小さく息をついてベンチに座った。冴子がその隣に並ぶ。
「どうして希沙良って……」
言いかけて亮介は表現に困った。
希沙良の内の、どうにも不可解な部分。
「どうしてああなのか？」
見降ろして、十九郎が言葉をつないでくれた。優しい響き。
「そうだな、君になら……少し、聞いてもらえるかな。あいつのこと」
「あ、はい」
このあたりが十九郎の偉大なところだと亮介は思うのだ。
プライバシーに踏み込んだという罪悪感を亮介に抱かせないために、自分から、聞いてくれと依頼するのだ。そうすれば、過去を暴く責任はすべて十九郎ひとりにかかることになる。
「あいつの母親は、十六年前に亡くなっているんだけど」
淡々と語り出す。

「うちの母親の妹にあたる人で、布由江さんといってね……実を言うと潜在的な〈空の者〉だった」

「え!?」

がばと亮介は上体を起こした。

「純粋な血の持ち主ではなかったのにね……非常に稀なケースだけど、他の血が混じった人に〈空の者〉が宿ることもあるんだよ」

斎伽忍が生まれるより先に、たったひとり存在していた〈空の者〉。

そんな人がいたのだ。

「けれど布由江さんは〈空の者〉として生きることより、人として生きることを選んだ。〈空の者〉沙良耶としての人格は深く封じられたんだ。あくまで普通に結婚して、普通に子供を育てることを、あの人は選んだ。それは本家からかなり非難されたようだけど……心の、強い人だったんだ」

亮介は息を詰めて話を聞いている。

「人であることを選ぶとは、つまり〈妖の者〉の天敵であることをやめるということだ。〈妖の者〉を倒さない……いや、もっと直截的に言おうか、〈妖の者〉を食らわないということだ。……それはね……命を、縮めるんだよ」

「――」

「もともと〈空の者〉の本質は強すぎて大きすぎて、人間の体では支えきれないものなんだ。だから選ばれた血統の、最も相応しい者にしか〈空の者〉は降臨しない」

〈空の者〉であるということだけで、〈空の者〉を宿しているだけで、「器」である人間のほうの術力はひどく消耗するのだ。まして「力」を行使したりすればなおさらのこと。

〈空の者〉が〈妖の者〉を食らうのは、そうしないと「器」の術力が枯渇し〈空の者〉を支えきれなくなるからなのだ。術力とはすなわち生命力である。〈妖の者〉の内に集積された妖力をとりいれることで、〈空の者〉は術力を補強するのだ。

それが宿命。

「だから希沙良が生まれるころには、布由江さん自身も、周囲の人間も、そろそろ限界だと知っていたんだ。出産の負担は大きすぎる……希沙良を産まなければ、もう何年かは生きられるかもしれない。そういう声もあったんだけどね、あの人は頑として産むと言い張って……希沙良が生まれてすぐに亡くなった」

「……」

「で、希沙良には姉さんがふたりいるだろう。あの人たちには術力はまったくないんだ。父親も、一族のことは知っているけどごく普通の人だし……家の中でただひとり不思議な力を使うというのでね、物心がついたころに、希沙良はかなり気味悪がられたらしい。まだそのころは上のふたりも子供だし、おまえが母親を殺した、みたいなことを言ってしまったりしてね

……」

「そんな……」

言いかけた亮介を、十九郎は視線で止めた。

「ひどい、とは言わないで欲しいんだ。あの人たちにはあの人たちの立場があって……布由江さんは本当に愛されていたから」

悲しみとも痛みともやるせなさともつかぬ横顔。

誰も責めるな、と十九郎は言うのか。

「……だから生まれた時から、希沙良は家に捨てられた子供なんだよ。多分ね……。だから……希沙良は捨てられることをひどく恐れる。もうこれ以上捨てられてなるものかと、もうただそれだけがあいつの全部を縛っているんだよ」

まるでそれが十九郎自身の孤独であるように語るのに。それでも責めるなと。

「しかも希沙良という名前が……布由江さんを、つまり『沙良耶』を『希む』、求める……そういう名前だろう。自分自身が存在するひきかえに失われたものを希求する名前が自分を表す。これは大変なパラドックスだよね……」

「――ひどすぎる」

制止されても、やっぱり言わずにいられなかった。亮介は頭を振った。

「やっぱりひどいよ。俺は嫌だ！　希沙良が可哀想だ！」

「……」

少しの間、十九郎は沈黙した。

どこか切ない笑みを、亮介に向ける。

「哀れんでしまうのも、残酷だよ」

「――」

哀れむことなら、誰にでも出来る。

慰めることなら、誰にでも出来る。彼の立場にない以上彼の気持ちなどわかるはずもないのに。言葉では何とでも言える。

それは救いになるだろうか？――

亮介は絶句した。泣きたくなった。

（そんなところまで、この人は）

哀れみなど越えたところで、なんとかして希沙良の全部を引き受けようと……十九郎はしているのではないのか。

そんなことをやろうとしている人が、希沙良にはいる。

それを思うと、胸が熱くなった。

彼がいる限り、希沙良は独りじゃないのだ。決して独りではないのだ。

「……そうして依存させておいて、そのあとはどうするの？」

それまで沈黙を保っていた冴子が、ぽつりと言った。十九郎がふっと顔を上げた。
「希沙良君が何がなんでも捨てられたくないと思ってるのは、要するに十九郎君でしょう？今のあの子って、他に拠り所が全然なくて、十九郎君ひとりにただ寄りかかっているみたいだわ。自分の足でまっすぐ立てない人間を甘やかすのは決して本人のためじゃないでしょう」
「……さすがに鋭いね。そのとおりだよ」
ため息まじりに十九郎は呟いた
「そこが俺の弱さだね……」
「思い切って突き放してみればいいのに」
「それは一度、やってみたことがある」
冴子の台詞にすかさず答えて、十九郎はそこで初めて、迷うような眼を見せた。語ることに対する逡巡。
しかしやがてゆっくりと……記憶をなぞるように、慎重に言葉をつなぐ。
「……いつまでも俺にばかり頼るなと、俺がいなくなっても平気になれと、そう言ったんだ」
そうしたら。
あれは中学の時だったろうか。
十九郎がそれを口にした途端——。
異変が起きた。希沙良は怒りも泣きもしなかった。叫びも笑いもしなかった。何も。何も出

来ずに。

ただ、立ち尽くした。――オーラが燃えあがった。全身から気が燃え狂った。ごうと放散し宙を埋めた。

無制限にオーラを発して。

力のたがが外れていた。身体が支えられる限界を超えて全身から術力が暴走した。爆発。

放っておいたら死んでいたはずだ。

呆然と立つ希沙良を抱き止めてやるしかなかった。他にどうしようもなかった。

あの時の記憶は、希沙良には残っていない。記憶に残されぬほどに恐ろしい地平へ、その時彼は追いやられたのだ。だから……。

「だから、どうすることが希沙良のためになるのか……本当は、まだわからない。全然わからないんだ」

十九郎の話に、冴子もそれ以上の言葉を失った。

「とにかく時間をかけてゆっくりと変わっていくしかないとも思う。――今回のことは、免疫をつけるいい機会かもしれないね」

ごく静かに、十九郎が言う。

なんとも言えない。亮介はため息をついた。果たしてそれでいいのだろうか？

それだけの負担を本当に十九郎ひとりで背負っていいのだろうか。背負わせて、希沙良は平

気なのだろうか。

「さて」

振り切るように十九郎は立ち上がった。

「その問題児のご機嫌を、やっぱり直してもらわないとね」

何も言えず見上げる亮介に、優しい笑顔を返す。

「大丈夫」

安心させるように。

そして十九郎はドアの向こうに姿を消した。ぱたりと扉が閉まり、余韻を残した。

亮介はひどく複雑な思いでそれを見送った。

(強いよ……)

そしてあまりに誠実だと思う。

もう、重くて辛くて難しくて——どうすればいいのかわからない。

冴子もさすがに遠い目をして考えこんでいる。

「!」

冴子を見たら、その瞬間大変なことに思い至った。亮介は愕然とした。

〈空の者〉の寿命。

〈空の者〉を宿しているだけで、『器』である人間の生命力は削りとられてゆく。

力を行使すればなおさらのこと。
（――そしたら忍さんは!?）
そんな馬鹿な。
そう思いながら、心臓は早鐘を打っている。ぎりぎりとしめつけられる。
冴子ならきっと知っている。
亮介はぐっと拳を握りしめた。訊けなかった。確かめるのは恐ろしくて……恐ろしすぎて……。

十九郎はカーテンを開けた。
ふてくされたように希沙良はベッドにもぐって背を向けている。
無言で立って、十九郎は待った。希沙良は身じろぎもしない。
眠っていないことはわかっている。
「……ムキになってる」
かなり長い静寂のあとに、希沙良の背がぽつりと言った。
「なんでそんなにムキになってるかわかんねえよ……」
「どうして」

「だってもっと簡単に出来るはずだ。斎伽忍に任せとけば囮なんて使わなくてもすむ方法があるかもしれないじゃん……それだけ凄まじい力が、あいつにはあるんだから……」
「ああ……」
十九郎は眩しそうな瞳でかすかに笑んだ。
「……確かに、ムキになっているよ。俺は怒ってるよ」
そうだ、忍ひとりにすべて任せたくなかったのだ。
自分の手で何かを為したかったのだ。怒りに報いるために。
「なんでそうなんだよ、おまえは！　なんでそんな……」
「希沙良」
静かだが力のある声で、十九郎は言った。
「奴らは、おまえをこんな目に遭わせたんだよ」
「――」
それが怒り。何よりも。
希沙良は動かなかった。ずっと壁のほうを向いていた。
「……馬鹿」
掠れた声で、ひと言だけ呟いた。

6　血の河

翌日の午前中、十九郎と希沙良は自由が丘の病院を訪れた。例の事故に巻き込まれた少女を見舞うためである。堀井加奈子というその少女は、小学二年生だった。

小児病棟の四人部屋は日光がよく入って気持ちがよかった。他の部屋から、けたけたと笑う子供たちの声が聞こえてくる。

加奈子は頭の良さそうな子だった。

「憶えてる？」

優しい瞳で十九郎がのぞきこむと、こくりと頷いた。

頭の白い包帯が痛々しい。母親が付き添っている。

「……怖かった？」

「よくわからない……」

正直な返答だ。いい子なのだろう。
「まったくこの子は、急にとび出したりするから」
愚痴のように母親が言う。
「加奈、とび出してないもん」
「何言ってるの、こんな怪我しておいて」
「だって本当だもん」
叱るような母親に、少女は悪びれず堂々と言い張った。それは本当のことだから。
「加奈子ちゃん」
十九郎が呼びかける。子供の苦手な希沙良が「げ」という顔を見せた。少し離れて、ベッドの足元のほうに立っている。
「あの信号の所でね、そうだな……何か、音を聞かなかった?」
「え?」
「言葉でも、歌でも音楽でもいいんだけど……」
「あ、歌!」
あっさりと加奈子が頷いた。
「あのね、女の人がね、歌ってるの。かーらーす、なぜ鳴くの、からすは山に、かーわいい七つの子があるからよ……」

しっかりした声で「七つの子」を歌ってみせる。
「童謡……？」
十九郎は小さくひとりごちた。
「加奈子ちゃん、その歌は前にも聞いたことがある歌？」
「あの……」
おずおずと母親が口をはさんだ。
「その歌でしたら、私がいつも、この子の子守歌に歌っていたんです。だからこの子も憶えてしまって」
「子守歌？」
ハッとして訊き返す。——突如、腑に落ちた。
鍵だ。
探していたのは、その鍵だったのだ。十九郎は子供の感性というものに舌を巻いた。時として術者などより子供たちの感覚のほうが鋭いことがあるのだ。
「……よくわかったよ。ありがとう」
本心から礼を言い、十九郎は頭を下げた。若い母親が不思議そうな顔をして、それを見ていた。

「やだやだ」

病院の中庭に出て、希沙良はそう言って大きく深呼吸した。

「小児病棟って鬼門だ……ぞくぞくしたっ」

「可愛いじゃないか」

「やだっ。ガキ見ると蹴りとばしたくなるんだ俺。本当、嫌いなんだ」

心底、耐えられないという様子だ。顔から血の気が失せている。

「本当に蹴りとばすのだけはやめておけよ」

「目の前にいなきゃ蹴らねえよ」

目の前にいたら実際に足が出そうな言い方だ。

十九郎は肩をすくめ、ジャケットの内ポケットから手帳を取り出した。余白のページに何やら走り書きする。

ぴっ、と破って希沙良に差し出した。

「伝言を頼めるかな」

「いいけど……なんだ？」

受け取りながら希沙良が尋ねる。

「斎伽さんに渡してくれ」

手帳を戻し、十九郎は静かに言った。
「さっきの話で、ようやくヒントが見えた。そのことだ」
「……自分で、伝えればいいだろ」
手中に収めてしまった紙片を恨めしく見やって、希沙良が苦い顔をした。
「そのつもりでいるよ。ただ、万一ということがある」
「なんだよそれっ」
「可能性の話をしている」
軽くあしらうような言葉。
「不謹慎だ」
むっとして呟き、仕方なく希沙良はメモを財布にしまいこんだ。とりあえず約束は守る。非常に不本意だが。
「さて……」
空を仰いで、十九郎は息をついた。今日も快晴である。冷えこみは激しいままだ。
「じゃあ、ここで別れようか」
「……」
「ちゃんと、まっすぐに斎伽さんの所に行くんだぞ。寄り道なんかしたらただですまさないからな」

「おまえ、全然信じてねえのな」
「信じさせてほしいんだけどね」
「知るか」
思いきり嫌味な口調で答える。十九郎は笑った。
「それじゃ、またあとで」
上着の襟を合わせ、歩き出す。これから十九郎は単独行動に入るのだ。
「またあとで」
見送って、希沙良はぽつりと繰り返した。
直後。
「！　――」
思わず中庭の芝生に膝をつくところだった。ぎりぎりで踏みとどまった。左の手で口許を覆う。
本当に吐くかと思った。
立ち木の幹に手をついて体を支え、希沙良はゆっくりと呼吸を整えた。
理由はわかっている。妖気によるものなどではなくて――心の病。
十九郎の背が遠ざかっていくから。
心が悲鳴を上げて世界を揺らすのだ。



（まずいな）

木に寄りかかって、希沙良は痛切に思った。

（こいつは本当になんとかしないと……）

亮介、希沙良、冴子といった術者たちは忍が結界で守ってくれる。

つまり十九郎だけが無防備なのだ。ただひとり街中に放り出された餌だ。

とにかく、目的地も何も定めず動き回るしかない。いつ皓の目に留まるかわからない。

ヤマハ２５０Ｒを駆って十九郎は都心をひたすら移動した。

バイクを選んだのは、身体を晒すためだ。自分のオーラを妨げるもののないように。

（俺はここにいる）

強い思念を空へ送り。

（出てくるがいい）

挑発する。賭けだ、これは。

あの絡みつくような意識は、まだ感じられてこない。

焦りたくはなかったが、相手に失望したくもなかった。東京じゅうで自分ひとり見つけられぬような敵ではないと思いたかった。

早く——早く、姿を見せろ。
それは祈りにも似た思い。
「……焦らす趣味でもあるのかな」
明治通りの信号で停まり、十九郎は呟いた。
無為に時間が過ぎていくというのは、あまり嬉しい事態ではない。
午後……太陽光線はもう夕刻のものだ。
「そうか……」
発想を少し変えてみた。十九郎はアクセルをふかした。銀座のほうへバイクを向ける。
人混みの中を走り抜けるよりも、むしろ人がいなくて周囲に被害のない所で、ただ待っていたほうがいいのかもしれない。
そういう場所に、ひとつ心当たりがあった。
有楽町、銀座といったきらびやかな街を抜けると、そこには急にまったく違う空気が現れる。風の匂いが違う。驚くほどのギャップがそこにある。
海だ。
東京湾がすぐそこにある。その少し手前……隅田川の河口には魚市場があって、夏江の仕事とは縁が深い場所だった。
十九郎は勝鬨橋の前でバイクを駐めた。ヘルメットを脱ぎ、ハンドルにかける。見降ろす

と、隅田川の水面が静かに揺れていて、神秘的な印象さえ与えた。

（そんなにきれいな川でもないのに……）

何故か、この川が、この海が、十九郎は好きなのだ。決して清く澄んだ水ではないのに。

ゆっくりと歩いて、橋の半ばまで足を運んだ。

水には、なにか包容力を感じる。流れを見ているだけで心が安らぐ。

夕陽がだんだん強くなってきた。周囲がじわじわとオレンジ色に染め上げられていく。自分自身もその色に埋没し、一体となる。

ビルのシルエットが水面に落ちる。船が見える。

「――」

水際に目をやって、十九郎は川岸にせり出したコンクリートに気づいた。知っている場所だった。卸売市場の敷地内。

どうせ場所を選ばないのなら、と思いついた。屋根が張り出し、川に沿って結構長く埋め立てたコンクリート。水面は間近で、もちろん柵など立っていない。広さもある。

（試してみるか……）

橋を戻り、市場に向かった。夕刻なら人は少ない。この手の所にもぐりこむのは得意だ。

誰にも見咎められることはなかった。

川の水がすぐそこにある。パレットやフォーク車が放置されて人影はなく、目当ての場所に

踏み込んで十九郎はある確信を抱いた。
人が少なすぎる。
いや、完全に無人だ。これは……。
（人除けの……？）
やはり動きを追われていたのだ。期待は裏切られなかったらしい。十九郎は足を止めた。
湿った風が前髪を吹き上げた。
「囮だということくらい承知しているだろうに……」
「無論」
美しい声が答える。
「しかし……賭けにしては無謀。おまえにどれほどのことが出来るか、確かめに来た」
青いワンピースの腕を組み、皓は笑っている。その両脇に、皓よりは年若く見える女がふたり、それぞれ控えていた。十九郎は振り向き、正面から彼女を見据えた。顔を上げて。
誇り高き斎伽の血に恥じぬように。
「何らかのことは為す、と期待されている……そう思っていいのかな？」
両者の間は十五メートル程度。
「おまえは面白いよ……」
皓は目を細めた。

「私の波長にここまで深く同調する者も珍しい。しかし一方で、どうあっても動けるはずのない場面でおまえは何故か動く。何故だろうね。口惜しいよ。不思議だよ……。おまえのような男は初めて見た。……何がなんでも、眠らせたくなった」

「光栄だ」

短く答え、十九郎は身構えた。皓は片手を動かし、両脇のふたりを下がらせた。

「真名も志季も邪魔をおしでないよ……」

冷えた血を思わせる美貌。

忍のような神々しさはそこにない。あくまで闇に属し、どろどろとした憎悪と凄惨な殺気が似合う——魔の美しさ。

ふ、と皓の周囲に気が満ちた。

「!」

ビシッ、と火花の散るような音が上がった。互いの結界が接触したのだ。

一般に結界は本人を中心に半球に似た形で形成される。

結界を維持しながら、十九郎はおもむろに一歩踏み出した。皓が目を瞠った。ばりばり、と結界同士が鳴った。

異質なふたつの力がぶつかりあい、崩し合おうとする。

退がらず、皓は踏み留まった。嬉々として結界を支えている。十九郎はさらに歩を進めた。

ふたりの境で嵐が生まれた。
オーラのせめぎ合い。互角に近い。
力の拮抗を知り、皓は狂喜しているように見えた。楽しくて楽しくてたまらないのだ。この力比べに熱中している。違う戦い方をすれば、十九郎はあっさり倒れていたかもしれない。
「待っていた……」
陶然と皓が呟く。
「これを待っていたんだよ」
「……」
三歩目で、結界の抵抗は激烈なものになった。十九郎は歯を食いしばった。
オーラとオーラが絡みつき、金切り声をあげ、光を弾き、波を生んだ。
結界を支える腕がぶるぶると震えた。
さらに一歩。
「く……」
結界が撤退を哀願した。もちろん、そんなことは許されない。十九郎は全霊をあげて結界を張り続けた。汗が目に入る。
皓の腕も小刻みに揺れている。
耳をつんざく音だけがその場を支配した。

水の中を歩くような動きで、十九郎がじりじりと進む。水圧が強すぎてどうしても前へ行けない……そんな感触。皓は動かない。

「皓主！」

側近のひとりが叫んだ。髪の長いほうだ。

「下がっておれと言うに！」

皓が叱りつけた。振り向きもしない。

「余計なことを為したが最後、八つ裂きにしてくれるわ！」

「なれど」

「くどい！」

皓は本気だ。——

間近にその顔が見える。わかる……。

距離は五メートル弱。

「早く」

挑むように、皓が誘った。

「もっと強く！」

「……」

十九郎は右手を伸ばした。指先。熱い。

黄金の夕陽。
あと一歩。
結界に相手をとりこんだほうの勝ちだ。
（出来るか？　……）
迷う暇もなかった。指が届いた。
「！　――」
ぐい、と十九郎は皓の肩を引き寄せた。抱きしめた。
一瞬だけの――固い抱擁。
腕の中に。
「ぎゃあっ」
皓が絶叫した。磁石のような反発力が生まれ、両者ははじかれて地に転がった。凄まじい反動だった。
「……おのれ、おのれよくも……」
ざっ、とコンクリートに身をひきずり、皓が唸った。左肩を押さえる指の間からぶすぶすと黒い煙が上がっている。
「おのれえっ。護符を使ったかっ」
「貴様の負けだ！」

頬が切れて朱に濡れた。十九郎は身を起こし、そう叫んだ。ぐらつく頭を意志で支え、地面を蹴ろうとする。

「逃がすか!!」

「真名っ、およしっ!!」

ふたつの叫びが重なった。

皓の制止は間に合わなかった。身を翻そうとした十九郎の背後に、真名と呼ばれた女は既にまわりこんで——。

波妖気は、既に放たれていたのだ。

十九郎は完全に無防備だった。力を使い果たした状態だった。

波妖気がもろにその身を包んだ。

バランスが崩れた。意識は失われた。反動が与えられて——十九郎は水中に転落した。

さして大きな音は響かなかった。

沈み、流されてゆく。深く深く深く……。

「……」

そうっと立ち上がり、皓は水面を見やった。

静かな瞳。

壮絶な美しさで。

「……差し出がましい真似を致しました」
背後から、真名が声をかけた。
「いや、正しかったのだ」
肩を押さえたまま、皓が答える。
「しかし、つまらぬ……」
「……」
十九郎を呑みこんだ水面は夕焼けを照り返し、血の河のように見えた。

7 伏兵

六本木のマンションの入口で、亮介は希沙良と出くわした。
「よ」
ちらっと片手をあげて近づいてくる。
「何してんだよ」
「いやー……ここでいいのかなーと思って……」
「ったくトロい奴だなー」
ばん、と亮介の背中を平手で叩き、先に立って希沙良はずかずかと入っていく。エレベーターが三基ある。上昇ボタンを続けざまにしつこく押して、希沙良は腕を組んだ。
（せっかちなんだよな……）
だだっ広いエレベーターホールに足を踏み入れ、亮介はやれやれとそれを見やった。ひっそりとして、人の気配のない建物だ。

このマンションの九階に、斎伽忍が住んでいるのだ。
ようやくエレベーターが降りてきた。
「さっさとしろさっさと」
希沙良が歯をむいた。亮介はばたばたとエレベーターに乗りこんだ。人を挟みかねないタイミングでドアが閉まる。もちろん、希沙良の仕業だ。
「おまえ、もうワンテンポ早く動けないか？」
「コンパスが違うんだよ、コンパスがっ」
「そりゃ気の毒にな」
「……」
答える気力がなくなる。今日はまた格段に毒舌のキレが良い。
多分、苛々しているのだ。希沙良は……。
チャイムが鳴って、ドアが開いた。希沙良がするりと扉の間に身をくぐらせ、廊下に出ていく。亮介は慌ててそれを追った。
九〇七号室。
黒いドアの前に立ち、希沙良はベルを鳴らした。インターフォンの応えはなく、すっとドアが開いて冴子が顔を見せた。
「どうぞー」

ひそめた声で、ふたりを招き入れる。

土足でいい、というので亮介は少々びびった。そういう造りなのだ。

玄関から居間までの短い廊下は、両側の壁が鏡張りになっていた。合わせ鏡に映る不思議な像を見ながら亮介は歩を進めた。なにか神妙な気持ちになる。

ドアに鍵をかけて、冴子があとから追ってきた。

居間は意外にこじんまりとして、空気が落ちついていた。フローリングの床。

「ようこそ」

ひとりがけのソファに腰をおろし、斎伽忍はくつろいだ姿勢でふたりを迎えた。

窓のブラインドは降りて、昼間だというのに日光はまるで入らない。人工の照明だけが部屋を占めていた。

「どうも……」

口ごもりながら亮介は向かいの長椅子にそろそろと座った。希沙良が勢いよくその隣に座りこみ、脚を組む。

「土産があったりする」

つまらなそうに希沙良が言い、紙片を差し出した。受け取って視線を走らせ、忍は微妙な表情になった。失笑に似ている。

「……了解した。この件はあとで十九郎と話そう」

返答はそれだけだった。冴子が居間のドアを閉めると、忍はつと立ち上がった。確かめるようにドアのへりを指でなぞり、ノブの横に白い紙を貼りつける。名刺程度の大きさに見えた。何も書かれてはいない。

「扉は封印した。もう外へは出ないこと」

振り向いて、静かにそう言う。亮介はまじまじとその名刺大の紙を見つめてしまった。

「台所はその奥だ。反対側が洗面所。詳しいことは冴子に聞いてくれ」

「あ、はい」

何故冴子が詳しいのだろうという気もする。

その冴子は、台所からコーヒーを運んでくるところだった。ソファの間に置かれたガラスのテーブルに、白いコーヒーカップを並べる。

「僕の分は要らないよ、冴子」

「はーい」

そういえば忍が飲食する場面はあまり見ないな、と亮介は気づいた。

「カフェインは感覚を刺激するからね」

亮介を向いて、忍は瞳だけで笑った。

（なるほど……）

忍はソファに戻り、冴子も亮介の隣に陣取って、ちゃっかり亮介の腕にへばりついた。

希沙良はブラックのままコーヒーをすすって、むっと黙りこんでいる。
「さて」
三人を前にして、おもむろに忍が口を開いた。
やはり名刺大の、黒い紙を取り出す。
「方法を説明しよう。これと対になる護符を、十九郎に渡してある」
よく見ると、それは紙というより織物に近い。その上に何か文字が見えるような気がして、亮介は目をこらした。精巧に織り込まれた文様。
「……難しい護符でね……非常な精神力を必要とする。だからこの仕事は十九郎にしか出来ないんだよ。十九郎の力は『静』のタイプだからね」
事実しか語らない忍の口調。
「この護符を使って敵に『刻印』を灼きつける。それが十九郎の役目だ。刻印が成されれば、敵の居所は完全に摑めたも同じなんだ。そこから先はまた別の話になる。例えば——亮介の感覚が重要になってくる」
亮介は黙って目を上げた。亮介、と忍が名を呼んでくれるのは珍しいことだった。
多分、亮介の働きがまだ少ないせいだ。守られているばかりだから……。
「そしてこの護符は十九郎が持っているものと対をなす。つまり十九郎が護符を使えば、こちらのほうにも変化があらわれる。こちらに出来るのは、それを待つことだけだ。わかるね？」

忍は言って、その護符をテーブルの上に置いた。
「待つ作業は三人に任せる。僕は隣の部屋にいるから、何かあれば呼ぶこと。どう時間をつぶしてもかまわないが、外には出るな。以上だ」
「変化、というとつまり……」
立ち上がる忍に、おそるおそる亮介は訊いた。
「わかりやすいと思うよ。燃えるんだ。心配なら部屋を暗くしてみてもいい」
台所の向こうのドアを開き、簡単に忍が言う。燃える、と言われて希沙良がテーブルの上におっかなびっくりの視線を投げた。ドアが閉まった。
残されて、亮介は冴子と顔を見合わせた。
「……困ったわね」
今回はさすがに冴子も少し元気がない。
「電気、消してみようか？」
「あ、それじゃろうそく立てましょ。まだましだから」
亮介の提案にばたばたと動く。本当に、この部屋をよく知っているのだ。
テーブルの上に、護符からは離して、キャンドルを立てる。照明を消すと、今が昼間だということを忘れそうになった。
「……で、何これ、ただずっと待つだけかよ」

ろうそくの灯に顔をしかめ、希沙良がボソッと言った。
「そう言ったじゃん」
「じょおっだんっ。なんだよそれっ、めんどくせぇッ」
「あのね……」
「俺っ、一時間で胃に穴あけるぞっ。責任とるのかよ、ええ?」
希沙良の台詞は、かなり正しい。
希沙良でなくても胃の痛い事態だ。亮介は恨めしく護符とやらを見やった。
「で、本人さっさと退場するあたりがサイコーだ」
ぶちぶちと希沙良は呟いている。コーヒーカップを噛み割ってもおかしくない。
ふう、と冴子がため息をついた。
「……ちょっとお姫さん、それやめてくんない?」
不機嫌そのものの顔で希沙良が口を出す。
「……何よ、いきなりえらそーに」
冴子の言葉にも棘がある。
「なんか通夜みたいだからやめろっつってんだよっ。神経さわるっ」
「あたしがどんな顔しようがあたしの自由でしょうが」
「それすげえ勝手な理屈と違うか!?」



「うるさいわね、人の行動にケチつけないでくれる!?」
「ちょっと、あの、ふたりとも……」
がっくりきながら亮介はふたりの間に割り込んだ。これは疲れる。
希沙良はついとそっぽを向き、冴子もくるりと希沙良に背を向けてしまった。これがずっと続くのか、と亮介は天を仰いだ。
そして実際にそれがずっと続いたのである。
これは修羅場だ。二時間経過した時点で亮介は確信した。これなら〈妖の者〉とずっと対峙していたほうがまだましかもしれない。冗談でなく気が狂いそうだ。
胃に穴をあけたかどうか定かでないが、希沙良はソファに沈みこんでしまっている。転げまわらないところが偉い。とにかく護符も見ずにソファの背に顔を押しつけて、膝を抱えこんでまるくなっている。本気で体調は悪そうなので、亮介は特に声はかけなかった。
冴子ははじめのうちはコーヒーをいれなおしたりしていたが、万策尽きて今は黙りこんでいる。親の仇でも見るような目を護符に向けて、頬杖をついていた。
ふたりの間に挟まれて、亮介は為す術がなかった。ため息をついただけで希沙良が怒るし、冴子と話そうにも話題がない。
ただ待つことがこんなに辛いとは知らなかった。
今ごろ、十九郎はどうしているのか。

もし失敗したら？　……それはどうしたらわかるのだろう。忍はどんな手を打つのだろう。わからない。何も教えてもらえない。

そうだ、今回忍は何も……肝心なことは何も話してくれていない。諒のことすら。

「！」

がばと冴子が動いた。亮介も目を瞠った。

「希沙良！」

肩を摑んだ。希沙良が振り向いた。

ちり、とはじめは火花が見えた。

続いて発火する。護符が一瞬で炎に包まれた。わっ、と燃え尽くし灰も残らない。すぐに消えた。

三人が反応を起こすより早く。

奥の部屋のドアが開いた。コートを羽織りながら忍が現れる。

「希沙良」

いきなり忍はそう呼んだ。

「来るか？」

「――」

状況の読めぬまま希沙良が立ち上がる。
刻印はなされたのだ。しかし……？
「冴子と亮介はここに待機。連絡するまで動くな」
言い捨てて、忍は白い壁の前に立った。
「壁抜けをする。希沙良、どうする？　ひとりなら連れていける」
希沙良は厳しい眼を上げ、それに歩み寄った。
「行く」
短く答えて。
忍は左手を差し出した。右手は壁にあてている。
「決して放すな。離れたら次元で迷う」
無言でそれを握り、希沙良は頷いた。次の瞬間。
亮介は目を疑った。
忍は壁の内に踏み込んだ。溶けこむように。希沙良がそれに続いて姿を消した。

壁をくぐったと思ったら、いきなり外だった。夕暮れ。背後にはなにか倉庫らしき建物の壁。忍は先に歩を進めて川べりに向かっている。

何の川だかわからない。希沙良は周囲を見まわした。知っている、かもしれない。
（隅田川？）
六本木から築地まで跳んでしまうのだから大した能力だ。希沙良は忍を追ってコンクリートを踏んだ。
（？）
嫌な、感じだ。何かとても嫌な感じ――。
希沙良は息を呑むようにして水面を見やった。何故気にかかるのかわからない。忍は何も言わない。
夕陽はもう沈みかけて、空は蒼暗くなってきている。
何故、忍は自分をここへ連れてきた？
心臓を貫くような思いつきが閃いて、希沙良は忍の横顔を振り向いた。
「下がっていろ、希沙良」
忍は別の所に目をあてていた。柱の陰。
誰かがそこにいる。
忍の視線を向けられた途端、そこからドウッと妖気の塊が放たれた。
忍はまるで動かず、彼の前で波妖気はあっさりと霧消した。物陰から飛び出した真名が、驚愕も隠さず、離れて着地した。

「な……何者っ!?」
叫ぶ女を見返り、忍はうるさげに片目を細めた。
「無礼ではないのか」
声が、違う。常の忍の声とは違う。
それは人間の肉声ではあり得ない響きだ。
「よく調べもせずに……不勉強だと皓に伝えろ」
「なに……そういえばおぬし、以前に皓主の技を……まさか」
そんな、と呟き真名はずず、とあとずさった。
「言わねばわからぬか」
忍は確かに……笑った。
「よかろう、皓に伝えるがいい。我が名は空者総帥、伽羅王なり。返礼を待て」
「――く、〈空の者〉？」
喘ぎ。ぐらり、と女の影が揺れた。
「なんだと？　……そんな……あり得ぬ……」
「いつの話をしている」
冷笑し、忍は一歩動いた。ひっ、と叫んで女は跳びすさった。
「我が手の者を傷つけた罪は重かろう……覚悟しておけ」

「伽羅王直属の者にしては不甲斐ない」
開き直ったのか、震える声で真名は言い返した。
「子供騙しが……とうに、海の藻屑よ」
「!?」
希沙良が顔色を変えた。
忍は答えない。
静淑すぎる殺意。
「去れ。貴様に資格はない」
「わ、私を逃してかまわぬと……?」
うわずった真名の問いに、笑みを残し、忍が呟く。
「いずれ同じこと……」
「……！　よくぞ言ったな！」
怒りに身を震わせながらも、真名は姿を消すしかなかった。跳躍し、景色にまぎれる。
黄昏。太陽は退場した。
忍がどんな顔をしていようと関係なかった。希沙良は水際に駆け寄り、膝をついた。
頭では納得していない。信じていない。
けれど。

知っている。希沙良はその光景を知っている。この水に、十九郎は必ず沈んだ。その光景が胸に伝わっている。知ってしまっている。

何故、こんなに全身でそれを思い知ることが出来るのだ。自分は。

ぼんやりと呆れてしまう。そんなにまで。

そんなにまで近い。

――嘘だ。嘘だ、それは嘘だ。

希沙良は無意識に頭を振った。何か呟いていたかもしれない。自分ではわからない。

それは嘘だ。自分が思い上がっているだけだ。

そこまであいつのことをわかってなんかいない。いつも自分の予想を裏切って、とんでもないことばかりやるんだ、あいつは。絶対にそうだ。

俺の思いどおりになんて、決して……。決して。……いや、違う。

違う。期待しちゃ駄目だ。俺の期待はいつも裏目に出るんだから。違う。どうすればいい？

違う。嘘だ。嘘じゃなくて。そうじゃなくて……。

どう思えばいいかさえわからない。感情さえ決められない！

だってまさか死んだなんて。

「――」

まさか死んだなんて!?

「違う」
波妖気。自分は知っている。あれを受けて。あれを受けた。
「違う」
知っている。息が出来ない。苦しくて苦しくて――死にそうな苦痛。
「違う」
あれを受けて、水に落ちたら。
知っている。どうなるか知っている。
「違う！」
「希沙良」
耳元で、叱るような忍の声が聞こえた。
忍は自分を水面から遠ざけたようだった。肩を抱えられるようにして自分が立っているのに、希沙良はようやく気づいた。
忍が顔を上げ、声を投げた。
「もう大丈夫だ。そろそろ出てきてもいいんじゃないのか――諒」
呼びかけたその名前は。
その名前は。
希沙良の視界が焦点を結んだ。奥歯が小刻みに音をたてた。

聞きたくもなかった。その名前。
「まさか寒中水泳までやらされるとは思わんでしたよ……」
間のびした台詞。どこかいたずらっぽくて、けれど自信に満ちて明るくて強い……。
よいしょ、と川岸に手がかかった。
片腕だけで体を引き上げる。もう一方の手は肩に抱えた身体を支えて。水が鳴った。
「お待たせしました」
にっ、と不敵な笑みを浮かべて、水沢諒は言った。
地面に足をつけ、肩に負った十九郎をそっと降ろす。
「水も飲んでないから大丈夫。ちょっと冷えたかもしんないけど」
意識のないその身を横たえながら、諒は慎重な表情を見せた。
蒼ざめて固く瞼を閉ざした横顔。やけに白い。
「わかった。あとは引き受けよう」
忍が歩み寄り、ひざまずく。両腕に抱え上げた。
「冴子に連絡をとって里見家によこしてくれ。僕の部屋にいる」
「了解」
ぴっ、と片手を上げて諒が答える。忍はそのまま歩み去った。——壁に消える。
「びっくりするだろな、あいつ。やっべー……」

ひとりごちて、諒はつと目を上げた。
感情の整理がつかぬ表情のまま、希沙良が立ち尽くしている。
とりあえず挨拶くらいは礼儀というものだろう。そう思って、諒はちらっと手を振った。
「ども。お久しぶり」
「……何だ？　おまえ」
低い、声で希沙良が言った。
「なんだっつってもねー……」
「伏兵を気取ったつもりか？」
「――」
見抜かれたか。諒の眼が真剣になる。
「一応ですね、今回はそういうことになるですね」
「！」
渾身の力で希沙良は諒を殴りつけた。手加減しなかった。
衝動的だったかもしれない。
「てめえ！」
諒が怒鳴った。
「相応の礼だ！　恥を知れ、馬鹿野郎!!」

怒鳴り返して希沙良は背を向けた。
諒はそれを見送って、特に言葉は続けなかった。

8　救い

「こんなことが許されると思いますか!?」
頬を押さえ、諒は歯をむいた。
「仮にもですね、命の恩人ですよ。それをですね、それを殴ってくださるとは何事っ。頭にくるではありませんかっ。もおっ」
「……ま、気の毒にな」
控え目に同意して、亮介は缶ジュースに口をつけた。ここは亮介の部屋である。ジュースは亜衣の差し入れで、つまみは冴子の手土産である。一応親には「勉強会」と言っておいたが……果たして通用するか？
「いつまでも愚痴ってんじゃないわよ。女々しいわね」
冴子が露骨に馬鹿にした眼を諒に向けた。
「あんたみたいな奴は殴られて当然なのっ」

「ひ、ひどい。何故僕ばかりがこんな目に遭うのだらう。しくしくしく」
「ちょっとやめてよ気持ち悪い……」
「でも、まさか水沢君が前から東京に来ていたとは思わなかったなあ」
さきいかの袋を破りながら亜衣が言う。諒が戻ってきた、と聞いて駆けつけたのだ。
「おいしい所取っていくんだもの、水沢君って」
「それは言えたわね」
ぎっ、と冴子が諒を睨んだ。たじたじ、と諒が逃げる。
「なーにーが、伏兵よっ。こっちは全然行方も知らされないし、どっかで行き倒れてんじゃないかと思ってたんだからね。分不相応にカッコつけたことしたりするから殴られるのよ、身のほど知らずっ」
「だからそれは忍がそうしろって……俺のせいじゃないっ。俺だって早く亮介に連絡とりたかったもんっ。俺は悪くないもんっ」
「忍様、ひいきだわっ！　なんで諒ちゃんだけ特別なのよっ」
「俺のせいじゃないもんっ」
諒と冴子の舌戦は果てしがない。亮介は仕方なくごほごほと咳払いした。
「……あのさ……」
「はいはいはい、何でしょ」

くるりと諒が向きなおる。
「結局さ、忍さんの指示ってどういうことだったわけ？」
久々すぎてなにか妙な感じだ。改めて話すとどうも緊張してしまう。
「だからねー……」
視線で隣の冴子を牽制しながら、諒が口を開いた。
「半月くらい前に、俺こっちに帰ってこれるはずだったの。そしたらいきなり帰ってくるなって忍に言われてさ、ずっと足止め。なんか今のところ敵さんにマークされてないの俺だけなんだって？　そいで三日前にこっちに呼ばれて、なんと里見十九郎さんのガードをずっとやってったわけです。あの人強いからガードは要らんと思ったけどねー、とにかく敵さんたちに俺はいないと思わせながらいざって時に役に立つように、というのが忍の指示」
「へえー……」
「やっぱひいきよっ」
「馬鹿者、大変だったんだぜっ。泳いじゃいましたよ、この寒さで。おまけにぶたれるし」
「自業自得よね」
「あのなー」
「……まあ、うん、希沙良は怒ると思うな」
ぽつりと言ったら、他の三人がいっせいに亮介に目を向けた。亮介はぎょっとした。

「……んじゃ崎谷君はワタシが殴られても当然と、そうおっしゃるわけですか。そうでしたか。よよよよ」

「なっ、何も泣かなくてもっ……」

「そうなのよねえ、最近亮介ちゃんって希沙良君と癒着してるのよねえ、どういうわけか」

「癒着ってあの、別にそういうわけじゃ……」

諒が泣き崩れ、冴子が冷ややかに言って、亮介はじたばたと床から腰を上げた。

「水沢君、かわいそう」

亜衣が小さく呟く。亮介はとどめをさされた。

「だから……あのね、希沙良ってそんなに悪い奴じゃなくてね」

「崎谷君崎谷君」

言いつのろうとした亮介に、亜衣が手招きした。小声で囁く。

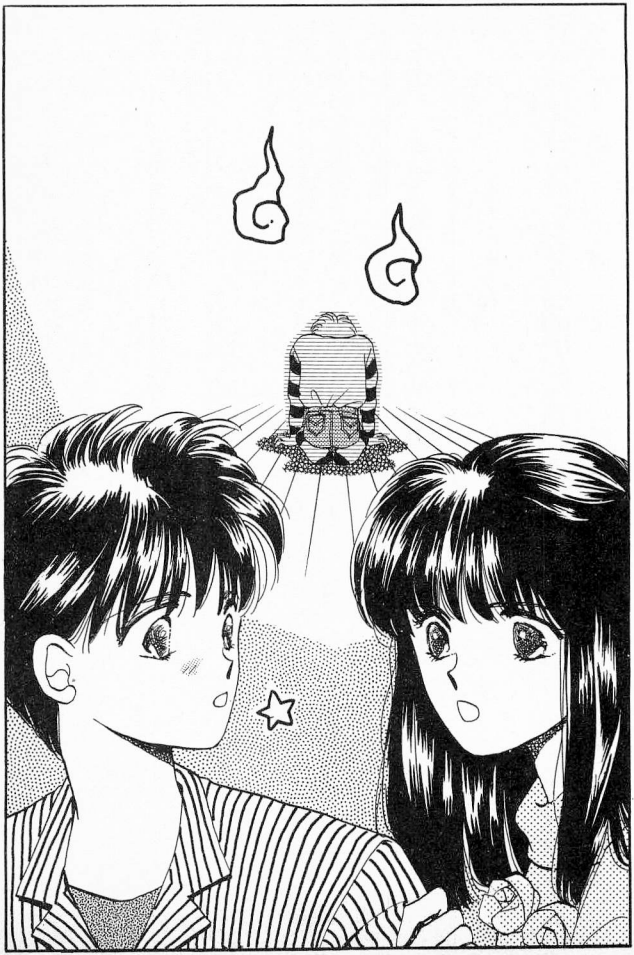
「和泉君のことはまた別の話なの。……水沢君に、お疲れさまって、ちゃんと言った?」

「――あ」

べしゃっと床につぶれている諒を見やって、亮介は息を止めた。

そう言えばそうだった。

また例によって、勢いに呑みこまれて大切なことを言いそびれるところだった。亮介は顔を上げた。



「諒」
わざとらしく倒れた背中が、かすかに揺らぐ。
「――えっと、大変だったよな。……でもさ、会えたからいいよ」
「……」
えへへへ、と不気味に笑って、そろそろと諒が身を起こした。
「うそ泣きだよーん」
「そんなことわかってるわよ、はじめから」
「がーん」
容赦のない冴子の台詞にオーバーなリアクションを返す。
(ほんとに全然変わってない……)
嬉しいというか情けないというか。亮介は深々とため息をついた。
「亮介君っ。亮介君には何かお変わりはありませんかっ」
ずい、と諒が膝を進めてくる。
「おおっ。もしかしたら背が伸びたりしてない?」
「あっ、鋭い! ……つっても一センチだけどさ」
「よいよい。これからどんどん伸びるのです」
ぐりぐりと頭をなでられてしまった。頭をなでられてるうちはガキだと思うのだが。

「ええっ、亮介ちゃんの背が伸びたら嫌だなー」
「そういうこと言わないでくれる？　切実なんだから本人は……」
ようやくペースが戻ってきた。亮介は顔をしかめ冴子に答えて、ポテトチップに手を伸ばした。
「……で、そうだ、里見さんってどうだった？」
彼女はここに来る前、里見家に寄ってきたのだ。亮介の問いに、冴子は安心させるように頷いた。
「波妖気の毒は抜けたから、休めば大丈夫。負担が大きいから、わざと起こさないでそのままにしてきたの。睡眠をとるのがいちばんだからね。結局、疲労を消すのは本人の回復力だし」
「あの人、感覚強いから大変だったろうな……」
「多分ね……」
「でも本当、俺はなかなか尊敬しましたよ、あの人」
諒が真顔になって言う。
「とにかく強いもん。なんか信念の人だよね、あれって」
「しかし周りの心配は考えてないという」
亮介は肩をすくめた。
「だから希沙良も頭に血がのぼっちゃうんだよ」

「あっ、嫌なこと思い出したっ」
「わかったわかった」
「……それで、この先はどうなるの？」
亜衣が尋ねる。諒と亮介は目を見合わせた。
「えっと……」
亮介のほうが口を開く。
「だから、里見さんが皓に『刻印』をつけたから、皓がどこにいるのかがわかるようになったんだよ」
「そうそう。オーラが強烈に見えるようになってるわけ」
「で、それを利用して、近いうちにこっちから攻めこもうという……」
「……」
亜衣が沈黙してしまった。亮介は口ごもった。
「水沢君」
きっ、とその眼が諒に向けられた。
「あっ、はいっ。なんでしょうっ」
「責任、とってよね」
「う」

諒が逃げ腰になっている。
「あたし本当は嫌なんだからね、こういう危険なことって。そのあたり、肝に銘じておいてよね。とりあえず、やめろとは言えないから」
「責任ですかっ。とりましょう、ええ」
「よろしくね。水沢君はどうなってもいいんだけど」
「言ってくれるじゃありませんか……」
何が起きているのか今ひとつ摑めずにいたら、諒が複雑な顔で振り向いた。
「亮介君。君のことですぜ」
「あ。それはまた……」
ひたすら頭が下がる。恐縮するしかなくて、亮介はぐしゃぐしゃと髪をかきあげた。

「……飲みなさい」
目の前に、湯気をあげるホットミルクが置かれた。希沙良は小さく息をついて、顔を上げた。
きっとひどく情けない顔をしていただろう。夏江は薄い微笑を返し、向かいの椅子についた。

「十九郎、しっかり寝てるわよ。見てくる？」
「あ、いい」
マグカップに手をのばし、希沙良は低く答えた。
「……俺ね、あいつが寝てるのって見らんないんだ。絶対、何がなんでも叩き起こさないと気がすまないんだ。だから駄目」
「どうして？」
テーブルに頬杖をついて、夏江がやわらかく尋ねる。
「夏江さん、笑うんじゃないかな」
「何」
「……馬鹿みたいだからさ。……俺、あいつの寝顔見てると……本当、馬鹿なんだけど、すげえ心配で心配で駄目なんだ。ああこいつこのまま死んじまったらどうしよう……なんて……」
「そうか、そういえばそんなこと言ってたわね、あの子」
ミルクの湯気が視界を曇らせる。
「希沙良を泊めると絶対先に寝られないって言うの。希沙良のわがままも極まれりとか思ったわよ。……そう、そういう理由」
夏江の呟き。優しくて暖かくて……。
「……じゃあ、今日はかわいそうだったわね、希沙良」

「……」
言葉が痛い。テーブルの上に投げ出した腕に、希沙良は顔を埋めた。肩が震えた。
「怖かった……！」
「そう……」
掠れた台詞に、静かに返る答え。
「そうね、そうだったわね……でもね、もう大丈夫よ」
「……うん」
「大丈夫よ。もう終わったのよ」
「……」
かたかたと指は震えるまま、なんとか希沙良は顔を上げた。
マグカップを両手で包む。熱が少しずつ伝わって……。
「ごめん、夏江さん」
切なくて。
「どうして希沙良が謝るの」
「俺……俺が、不様にやられたりしたから」
希沙良は唇を噛んだ。
「周りがやられると必死になっちまうから、あいつは……」

「でもそのことで希沙良が負い目を感じるなら、変じゃない？」
夏江は両眼を細める。
「十九郎の行動には十九郎が責任をとるのよ。誰にも肩代わりは出来ないし、許されないわ」
「……」
どうして彼女には、いつも正しさと優しさが同居できるのだろう……。
「駄目だな、俺って……」
息を吐きながら希沙良は呟いた。
「どうしたのよ、いつになく殊勝すぎるわよ」
「俺らしくない？」
「そうよ。希沙良はやっぱり問題児だから希沙良なのよ」
「ひどいよ、それ」
笑みにならない苦笑を浮かべ、ホットミルクを口許に運ぶ。
「希沙良が悩みすぎることもないし、十九郎が走りすぎることもないと思うわ。物事にはバランスってものがあるから」
正面から見据えるように、夏江は言った。
「例えばあなたにとって十九郎が必要なように、あの子が今の十九郎であるためにはあなたが必要なのよ。……きっと、そうよ」

「……そうかな」

不安で不安でたまらない。本当にそうならばきっと救われるけれど。

「そうよ。……あたしは、あの子を育てるのに随分わがままを通したし、片桐も本当は心配していたわ。このままだと、あたしたちのために十九郎がいちばん不幸になるかもしれない。そう思ったわ。けどね、今のあの子になら、あたしも誇りを持てるし片桐も負い目を感じないのよ。多分……希沙良が、あなたがいたからだとあたしは信じている。あなたがいたから、あの子は強くなれたの。傍から見たら十九郎は不幸かもしれないし可哀想かもしれないわ。だけど、本人は不幸にならずにすんだのよ。わかるかしら」

「……」

ああ、本当にそうならばどんなにいいか。

けれど自分では、自分にその赦しを与えることは出来ない。決して自分では許せない。

「だから、今度は希沙良が救われなければならないわ」

確信をこめて、夏江が言う。

「十九郎は救われているのよ。そして今までの時間に対して希沙良が苦しみをね、呪縛をね、感じるようになっているのだったら、これからの時間を使って少しずつその呪縛から逃れるしかないじゃないの。なにも離れることはないわ。新しい距離を探せばいい。新しいスタンスを確保すればいいのよ。希沙良がいちばん幸せになれるように」

「……出来るかな」
「出来るわ。現にあなたは新しい仲間を認めつつあるんだし」
はっ、と希沙良は目を上げた。目が合った。
「……崎谷？」
「そうかもしれないわ」
「あいつ、どんくさいからさあ……」
笑いを噛み殺すように呟く。夏江は見つめている。
「少しずつ、世界は広がっていくわ。急ぐことはない」
「……」
……急いで、いるだろうか。
確かにそうかもしれない。焦っているかもしれない。
無理なことを急ごうとするから……血が流れる。そうではなくて、もっと正しい方法で……。
「そうだね。多分」
ようやく希沙良はまっすぐに夏江を見返すことが出来た。空気がほぐれてゆく。
「幸せになりなさい」
静かに、夏江が言った。

母にしかあり得ぬ瞳の色で。
それから、悲しみに似た笑みを作り、懐かしげに希沙良を見やる。
「……あなたのお母さんも、あたしにとっては大切な人だった」
「――同じくらいに？」
何と同じなのか、尋ねながら自分でわかっていなかった。自分にとっての十九郎と同じなのか、彼女にとっての十九郎なのか、十九郎にとっての誰かなのか。
「同じくらいにね」
頷いて、夏江が答える。
「失いたくはなかったわ。確かに」
「……」
「でも、耐えることは出来た。あたしには十九郎がいたし、そしてあの子はあなたたちを残してくれた。清美ちゃんも貴美ちゃんも、希沙良も、あたしたちにはしっかりと遺された。だからあたしたちは耐えられたのよ」
写真でしか知らない母の顔。
触れた記憶すら残されなくて。
「……女だったから、あたしたちは。それは感謝出来ると思えるわ」
「俺、似てるのかな、あの人に。俺のどこか、似てるのかな」

急きこむように、希沙良は訊いた。
夏江が手を伸ばし、希沙良の前髪をそっとかきあげた。
「あなたはあなたよ……あの子の何かを受け継いだけれど、でも、どこまでも間違いなく大切でただひとりの、希沙良だわ」

表参道の自宅に帰ったのは、いいかげん夜も更けたころだった。
星降る夜、とはきっとこんな夜を言うのだ。地上は明るいけれど、それでもわかる。空気が冷たく澄んで気持ちがいい。
原宿や表参道は派手な場所だが、一歩奥に入ればごちゃっとした住宅街になる。古くて、狭くて、土地の値段ばかりが高くて。
「――」
家の門が見えて、希沙良は眉をひそめた。
ぽつんと、門の脇に立ち尽くした人影は――。
(仕方ねえな……)
つくづくそう思いながら近づくと、晶子はついときれいな瞳を上げた。
「もう遅いぜ」

意外なほど静かな声が出せた。希沙良は門の前で立ち止まった。
「近くまで来たから……」
マフラーに顔をうずめるように、彼女が言った。嘘つけ、と希沙良は思う。
教室で倒れて以来、希沙良はほとんど自宅にいなかった。きっと連絡がとれなくて、心配したんだろう……。
本当に仕方がない。どうしてそんなに。
「寒いだろ」
希沙良の問いに、晶子は首を振った。
「駅まで送るから、早く帰れよ。親が心配する」
自然に、肩に手をまわして歩き出す。人通りのない細い道を、か弱い電灯に照らされながらふたりは歩いた。
しばらく無言だった。抱いた肩が冷えていて、悲しかった。いつから立っていた？　……
「どうして」
晶子が小さく言った。
「どうして駄目なの」
「……」
晶子は悪くない。彼女が悪いのではなくて。

やわらかい髪を、希沙良は指でゆっくり梳いた。
「だから言っただろ。おまえが嫌いってんじゃないんだよ……」
「どうにもならないの？」
立ち止まった。身を寄せるようにして。
「気に入らないことなら直すし、してほしいことなら何でもするから」
「――」
そうじゃないんだよ、と希沙良は呟いた。
「そうじゃなくて……俺は俺で勝手に捜してるだけだから」
肩を押して、また歩き出す。
「おまえのこと、本当に特別に好きになれればよかったけど……」
「……」
「間が悪いんだよ……晶子が俺のことどんなに好きって言ってくれても、俺はそれに負けて、負けっぱなしだ。それじゃ駄目だ」
「それでもいいのに」
車道が近づいてくる。
「私、特別じゃなくてもいいのに」
「嘘だよ、それは。それじゃ嘘になる」

きっぱりと希沙良は言った。晶子が言葉を詰まらせる。
表通りはいきなり明るくて、なにか虚構のようだ。
きっと「特別」の基準が違いすぎるのだ、お互い。歩きながら希沙良はそう信じた。
晶子を思って身に変調をきたすようなことは、きっとないだろう。例え彼女が危機に晒されても、自分は冷静に対処出来るだろう。背を向けられても胸は痛まないだろう。
自分はそれ以上の「特別」を知っているから。
そこにたどりつけない限り。
相手が本気であればあるほど、引け目を感じてしまう。いつまでも。誰が相手でも。変わらない。
地下鉄の降り口の前で、希沙良は手を離した。
小さな肩。守りたかったけれど。
「じゃあ」
うつむいて、晶子は答えなかった。
希沙良は一歩下がり、背を向けて来た道を戻りはじめた。振り向こうとは思わなかった。

9 召集

それは、板橋の一角にある。

その安アパートに誰が入っていようと、近所の住民たちにとってはさして意味のある事柄ではなかったし、特に関心もなかった。

だからその一室に美しい三人姉妹が出入りしはじめた時も、噂好きの中年婦人が少々興味を持っただけで、それ以上のことはなかった。勿論、その内のひとりの肩に焼き印に似た跡があることなど、知れるはずもなかった。

ただ、住民たちはふと気づいて言い合っただけだ。

どうも近ごろ、辺りから猫や鼠がめっぽう減ったような気がする……これはいったい何のせいだろうか、と。

二日後の夜中に、忍は召集をかけた。

すぐに動かなかったのは、十九郎の回復を待つためだった。また他方では金にあかせた調査を展開していたのだという。聞きこみで対象は既に限定されている。

池袋の高層ビルの屋上から、亮介は都心の夜景を見渡した。

眼鏡は学校で壊してしまって以来、かけていない。もう必要ないのではないか、と忍に言われた。

その忍は今隣に立って、金網の向こうを見つめている。

「……わかるか？」

忍が見返った。

「見えます」

緊張しながら答える。驚きを隠せなかった。板橋の方角に、強烈な光が見える。距離は相当あるはずだ。

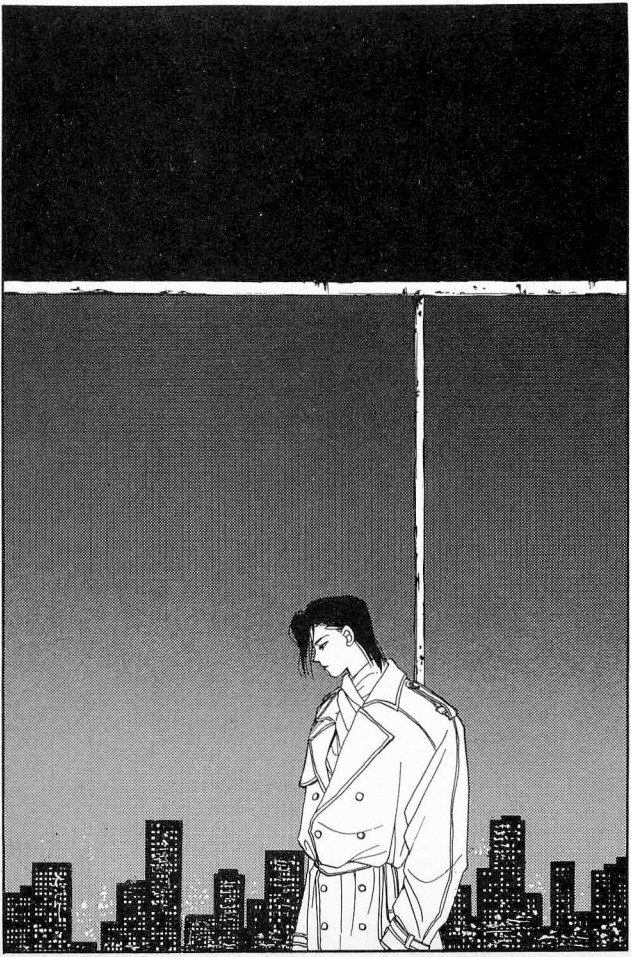
夜景の中でそれは、地上の銀河にまぎれこんだ恒星のように思えた。

後方では、寒風にさらされながら十九郎が目を細めていた。彼の感覚ならばその光をとらえられるはずだった。多分、冴子にも可能だ。

「で？」

感覚については心もとない諒が、口を切った。

「まさかまだついてくるとか言わんでしょーね」
「標的は把握出来たはずだ。あとは亮介に任せる」
夜景を背にして、忍が答える。
「当然。今回あんたでしゃばりすぎだよ」
諒の台詞に珍しく希沙良がうんうんと頷いた。ひとりだけ、やや離れて金網に寄りかかっている。
「心外だな」
かすかに笑って、忍は目を上げた。
「とりあえず、一同の自主性に期待したい」
「よーく言うよ――」
呆れ果てた様子で、のたのたと諒は歩き出した。下に降りるドアを開く。冴子がそれに続いた。
亮介はコートの襟元を押さえながら、忍を振り向いた。
やわらかい微笑が返った。彼本来の、人懐こい笑み。
「行っておいで」
「――行ってきます」
硬くなっていた心が解かれたようで、何故か亮介はひどく安心していた。嬉しかった……。



板橋まではタクシーで向かった。先の車に十九郎と希沙良が乗り、亮介たちはやや遅れてそれを追った。

後部座席に三人で座ると少々窮屈だ。亮介を挟んで反対側から、冴子がむっとした顔を諒に向けた。

「なんで前に行かないのよ」

「僕ってば寂しがりやですから」

しれっとして諒が言い返す。

「図体ばっかり大きくてしょうがないったら……」

「そういう言い方はよくない。僕が太ってるみたいではありませんか」

「うどの大木っ」

「あのねっ」

「あのさ……」

亮介が口を挟んだ。ずっと考えこんでいたのだ。

諒が言葉を切り、真顔で見下ろした。

「何」

「……やっぱり確かめようと思ってさ。里見さんに聞いたんだけど」
冴子が強い視線を亮介に向けた。
亮介はためらわず諒の眼を見上げた。
「〈空の者〉の寿命のこと……知ってるなら、教えてほしい」
一瞬、諒は息を呑んだように見えた。
わずかな時間でその表情は消え、どこか優しい瞳がそれに代わったけれど。
やはり諒はすべてを承知しているのだ。
「……里見さんは、どう言っていた？」
目を伏せて、訊き返す。
「〈空の者〉を宿しているだけで、生命力は削りとられていくものだって……力を使えばなおのことだって、聞いた」
「うん、正しいよ、それはね」
亮介の言葉に、あっさりと頷く。
「でもさ、それだけじゃないでしょーが。俺が何のために全国まわって『玉』なんか集めてると思うの、亮介ちゃん」
「え……？」
亮介は目を瞠った。

にっ、と口許で笑って諒が続けた。
「〈空の者〉は〈妖〉を食らう、ってやつでしょ。忍は派手に動きまわってるけどさ、その分ちゃんと補給はしとるわけです。だから心配ないって」
「……じゃ、えーと、つまり」
亮介は眉の根を寄せた。まさかと思いつつ。
「あれ……食べるのか？　要するに」
「そうじゃない？」
「げーっ！　嘘っ!!」
叫んだら、けたけたと諒が笑った。
「ま、普通に食ったりはしないってば。素直だねえこの子は」
「おいおいおい……」
「でも本当、その件については悲愴なことを考えないように」
人差し指を立てて、偉そうにそう言う。
「そもそも、あんな性格悪い奴が早死にするわけないでしょ」
「う、うーむ……」
納得してしまっていいのだろうか。
「今の発言には問題があったわよ」

冴子が冷ややかな眼を上げた。
「忍様に、言ってやろーっと」
「こらこらっ。それは裏切りではないのかっ？」

諒と冴子は陽動、というのが忍の指示だった。
希沙良と十九郎が本戦力で、亮介はレーダー役としてこのふたりの側につく。
「今回は果てしなく貧乏クジだなー」
タクシーを降りて合流すると、諒がぶつくさとぼやいた。
時々どこかで犬が吠えている。空気は静まりかえって、街灯も妙に薄暗い。
十九郎の顔色が悪いのは、街灯のせいばかりでもないだろう。亮介は思わずその横顔を窺ってしまった。彼が気づいて、視線を返した。
「平気ですか？」
「うん。心配ない」
力強く答えるけれど、どう見てもその顔からは血の気が失せている。まだ本調子でないのは明白だった。
希沙良は何も言わない。

確かに、平気だと十九郎が言い、忍がゴーサインを出してしまった以上、もう誰にも口出しは出来ないのだ。亮介も口をつぐんだ。

角を曲がると、木造のアパートが目に入った。二階建てで、階段は外についている。

「亮介」

諒が肩ごしに振り向いた。

「二階。奥からふたつ目」

短く亮介が答える。ドアも壁も障害にならない。はっきりとオーラが見える。

「んじゃ、分散しましょう。裏にまわっておくんなまし」

声をひそめ、諒は十九郎と目を合わせた。十九郎が頷いた。

「行くよ」

亮介の肩に手を置き、視線で希沙良を促す。

「頑張りましょーね、きーさん」

いたずらっぽく諒が手を上げる。希沙良は舌打ちだけを返した。案外、ふたりとも根に持つタイプなのかもしれない。亮介は諒を振り向いて顔をしかめた。ひらひらと諒が手を振った。

「さて」

三人を見送ると諒は冴子に向き直った。

動きやすい恰好にしろと言ったのに、冴子は例のセーラー服にハーフコートという服装だ。

やめろと言ったら、これがいちばん動きやすいと反撃されてしまった。
（ま、いいけどね別に……）
ぶん、と諒は右手を振った。光の剣がその手に握られる。
〈朱雀剣〉と呼ばれる細身の刀。
「出来るか？」
「まかして」
にっ、と完璧な笑みを返して、冴子は静かに階段に歩み寄った。
わざと足音を軽く響かせながら、金属の階段を上がってゆく。一歩一歩が、夜空に高く反響する。
諒は剣をおろしたままテラス部分の真下に立っている。
冴子がテラスに踏み込んだ。
歩を進めて、目指す扉まで。
ゆっくりと。
諒は動かない。待っている……。
ごく自然な足音で、冴子は奥から二番目のドアの前に立った。
ドアの向こうは、しん、と静まって物音ひとつしない。息づかいすら聞こえない。
冴子は小さく息を吸いこんだ。

そうっと右手を上げる。拳を作った。
一瞬の空白。
息を詰めて、冴子は動いた。ノックした。
こんこん、と。
「もしもし」
何食わぬ台詞。
静寂が残った。じわじわと空気が揺らぎ、冷えて——迫る。
来る！
「！」
ぎいん、と剣がはねかえり火花が散った。
跳躍した諒が冴子の前に立ちはだかり、光剣を受け止めたのだ。
ドアを破りとびだした黒い影はくるりと宙で回転し、テラスを蹴った。下の道路に跳びおりる。
すかさず諒が追った。振りおろす朱雀を正面から真名は防いだ。
冴子が階段を駆け降りてくる。
「ええい！」
真名が唸った。光剣を持たぬ左手を開き、諒に向ける。

がしゃん、とどこかで窓が割れた。
「亮介っ、逃げたっ！」
諒が呼ばわるのと同時に波妖気が放たれた。朱雀からプラズマが走りそれを包みこもうとする。が――。
「ちっ」
諒は左手で胸を押さえた。ぐらりと体が揺れる。結界では波妖気を防ぎきれない。近すぎるのだ。
真名はにやりと笑った。光剣で斬りかかってくる。
「生意気っ」
払いのけて、諒は怒鳴った。
女ではあるが力はやけに強い。ほとんど馬鹿力だ。
おまけに波妖気ときた日には……。
「諒ちゃんっ」
冴子が叫んだ。また波妖気。
朱雀剣の結界は効力を失った。毒気の塊がぶつかってくる。悪寒が走る。
頭を振って諒はぎっと目を上げた。膝をつきかけて、なんとか踏みとどまる。駄目押しとばかりに真名が左手を構えた。

「やれるもんならっ」
冴子の声。割りこんだ。諒の前に走りこむ。
両の手で、波妖気を受け止めた。
「冴子！」
――じゅっ。
蒸気の消えるような音が上がった。
冴子が笑った。その掌で波妖気は完全に浄化され、消滅した。
「諒ちゃんっ、誉めてよねっ」
「おうっ、えらいぞっ」
冴子に襲いかかる光剣を朱雀でなぎ払い、諒が答える。
力に押されて、真名がずるずると後退した。容赦なく諒は攻めこむ。顔を歪め、真名が左手を上げた。
「そんなにがんがん使って打ち止めになったりはしませんかっ」
「やかましい！」
真名が苛立たしげに言い返し、波妖気を放つ。
冴子が身構え、妖気をとらえた。圧力に押されてぐらりとよろめく。諒が肩でそれを受け止めた。

「おい、無理するなよ」
「してないわよ」
真名をきっ、と睨み返し、冴子が言った。オーラが燃え上がってふわりと髪が浮いた。昂揚する気迫。
美しい軍神の横顔。
「ほんっとに生意気よねっ」
まるでたじろがない台詞に、諒が苦笑めいた表情を見せた。

逃げた、という諒の声が聞こえた。亮介は空をふり仰いだ。
窓の割れる音は確かにあの部屋から聞こえた。——
「！」
十九郎が動いた。ざっ、と闇空に強烈なオーラがとんだ。
「皓！」
呼んだ十九郎に皓は宙でちらりと視線を投げ、そのまま先の道路に着地した。アスファルトを走り出す。黒髪が風に乗る。
飛ぶようなスピードだ。希沙良がダッシュして、それを追った。

オーラが見えすぎてしまう。気の毒に思えるほどだった。どんなに逃げても位置は完璧に摑める。亮介は続いて走りながら、その光芒に目をこらした。

「希沙良、皆の足を止めろ！」

亮介と並走する十九郎が鋭い声を発した。

離されないが、追いつくことも出来ない。希沙良の人並外れた脚力をもってしても、皆の速度を超えられはしなかった。

「まずいな……」

十九郎が呟く。

「あいつが逃げるはずはないんだ」

はっ、と亮介は胸を衝かれた。

確かにそうだった。惨めに逃走するような相手じゃない。何を狙っている？

何かたくらんでいるからこそ。

「うわっ」

直線の二百メートル先で希沙良が声を上げた。ぎりぎりで身をかわす。

喉元をかすめた光剣。

その持ち主は。

「おまえっ」

光を放つ右手の甲でぎん、と剣を払って希沙良が怒鳴った。足を止められる。皓が逃げる。剣を振るったその人影は。姿だけは。

「諒じゃない！」

後ろから亮介が叫んだ。

わかっている。姿だけだ。水沢諒のかたちをとっただけの化け物。

「ったく邪魔くさい！」

希沙良の手刀が風を切った。剣にぶちあたり、光の飛沫を散らせる。

諒の顔を盗んだ敵——志季が、にたりと笑った。よく考えるとなんともグロテスクな技だ。

「引き受けた！」

追いついた十九郎に希沙良が声を投げる。

「急ぐなよ」

そう言葉を返し、十九郎は脇を駆け抜けた。亮介が何か言いたげな顔で、それでも無言で彼に続く。

「つくづくこの顔とは縁があるよな」

暗がりの十字路に残されて、希沙良は手刀を構えた。別に本物でも全然かまわないのだ。志季は即座に斬りかかるかと思えた。対峙して、何故かしばしの間を置いた。

身長までが本人を写している。嫌味にもほどがある。

待ちきれず、希沙良が突っ込もうとした時だった。
「待て」
目の前の影が、低く言葉を発した。
聞いたことのある声だった。
ぐにゃりとその姿が揺れ、新たな人物が現れる。涼ではなく。
「希沙良」
剣を構えたまま、「彼」はそう呼んだ。
予測はしていた、つもりだった。
十九郎の表情そのもので。
「――」
希沙良は唇を噛んだ。盾にするように腕を組み合わせ、身を沈める。
冷気が背筋を走った。おぞましい……。
「おい、ちょっと冗談じゃすまないぜ……」
心を占めるのはひたすらに怒り。
あまりに無礼だ。無作法だ。許されていいはずはなかった。
十九郎が剣を薙いだ。がん、と希沙良は両手で受け止めた。
(気味が悪い!)

本当に体が震えた。怒りのためか。それとも恐怖か。——まさか。
剣が突き出されて、希沙良は数歩下がった。払うだけで精一杯だ。攻めこめない。
「逃げるな」
十九郎が言った。嘲笑った。
声だけは同じだ。同じだけれど。
（こいつ……）
希沙良は目を瞠った。
その瞳。
瞳を見つめたら、すべてがわかった。いや、わからないはずはないのだ。何年間彼を見てきたというのだ。世界じゅうでただひとり自分だけは、どんなことがあっても惑わされるべきじゃなかった。なんてことだ——なんて弱さだ！
「情けない！」
己を叱咤して、希沙良は体勢を立て直した。迷わず拳をくり出す。
剣が叩き返された。防ごうとした相手の左腕を、希沙良の手刀がひじからすっぱりと切断した。
「希沙良！」
血は流れない。ごと、と軽い音とともに腕が落ちた。

臆面もなく十九郎の顔で志季が名を呼ぶ。
「違う」
確信を持てた。希沙良は見下す視線で敵を見据えた。
「違う！　姿を写した程度で思い上がるな！」
その程度では誰も十九郎になれない。希沙良は知っている。
ためらわず右手を振り上げた。肩口から一閃で斬り捨てる。
かっ、と白光が上がった。
最後の瞬間だけ、志季は素顔を見せた。ほんの一瞬の……。
「余計な真似するからだぜ」
小さく舌打ちして、希沙良は緑色の「玉」を拾いあげた。
その場の空気を振り払うように、地面を蹴って走り出す。

10「坊やのお守りはどこへ行った」

皓の動きが止まった。
遠くからも、それは感じとれた。亮介は嫌な予感を覚えた。
十九郎が速度を緩める。下町の住宅街の外れ。
すっかり寝静まって、明かりもろくに見えない。ところどころに弱々しい街灯が立っているだけだ。
ごちゃっと建物に囲まれて、影を落としている小さな公園。
足を止め、息を整えながら、十九郎は目を上げた。その公園の内に、探るような視線を向ける。誰も見えない。
「どう思う」
押し殺した声。
「います。絶対」

「……そうだな。結界を張られたかもしれない」
言葉には悔恨が含まれている。皓に余裕を与えてしまったことになるのだ。
「崎谷君は、ここに残ったほうがいい」
低い柵の前で、十九郎は振り向いた。亮介は返答に詰まった。
「……そんな、どうして」
「ちょっと保証しきれない。危険すぎる」
十九郎にしてはストレートな物言いだった。緊張が見える。
「――そうやって全部ひとりで背負うだけじゃ周りは不幸なだけです」
思い切って亮介は言葉をぶつけてみた。
十九郎が沈黙する。
「俺、邪魔ですか。足手まといですか。里見さんひとりなら勝てるって言うんなら、俺は残ります」
怒られるかもしれなかった。それでもかまわない。懸命に台詞をつないだ。
「……」
見降ろす十九郎の瞳に辛い感情がふとよぎった。口を開く。
「……確かに、悲壮感に酔っていると言われても仕方がないね。たぶん俺は、自信がないんだよ……」

自信がなくて、きっと怖くて。
そう告白するのにも勇気が要るはずだ。
「希沙良が追いつきます。諒だって」
必死な思いで、亮介は拳を握りしめた。届けとばかりに。
「ああ、そうだね」
息をつくような呟き。
「それに、君は中和者だったな……」
「あ、俺……」
調子に乗って大口を叩いてしまったようで、亮介は口ごもった。ろくに力の制御も出来ないくせに、何を偉そうなことを言っているのだ自分は。
「わかった。俺の間違いだ。ぎりぎりまで君を守れるくらいの意地はあるはずだ」
亮介の肩を叩き、十九郎が笑んだ。
彼らしさが満ちた表情だった。見る者を安心させる……。
ほっとしながら、亮介は目を伏せた。皆を目前にしても恐怖はなかった。
「遅れないように。いいね」
十九郎の言葉に頷く。公園の敷地に、足を踏み入れた。
「！」

何かが、変わった。

気圧がずれたような違和感があった。

公園の中には、砂場とブランコとジャングルジム。あとは乾いた地面。

皓の強力なオーラはどこへ潜んだのか、まるでとらえられない。

ただ予感だけが……じりじりと嫌な予感だけがまとわりついて。

静寂？

どこかで耳鳴りがしている。

「よく来たね」

不意を衝いて声が響いた。十九郎が砂を蹴って振り返る。

皓が立っていた。

ジャングルジムの上。

月光に似たオーラをまとい、夜空に君臨して、女神のように。

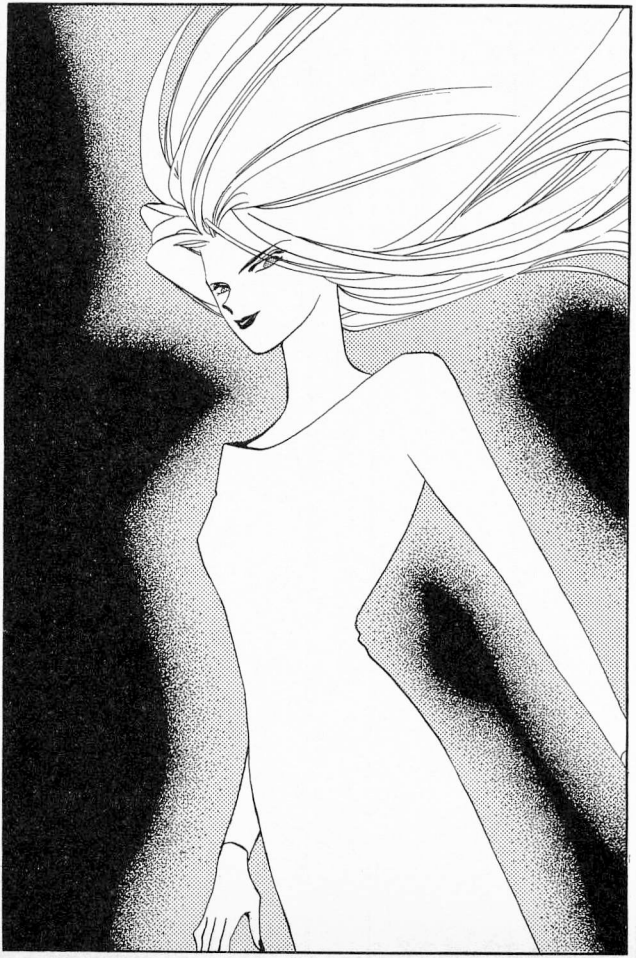
至福の表情で、その唇を開く。

「待っていたよ、本当に」

（え!?）

意志を裏切ってがくんと膝が折れ、亮介は愕然とした。

亮介の前に立ちはだかるように、十九郎が重圧に耐えている。屈服させようとする無形の力



に、正面から逆らって体を支えている。
「おまえ……やっぱり」
いつくしむ眼を向け、皓は言った。
すべてが彼女の期待どおりなのだ。何もかもが彼女の手の内で踊らされているとでもいうのか。
紅の唇が動いた。波動が溢れ出た。その歌は。
——知っている歌だ。
何よりも懐かしく強いメロディー。
心を縛り放さないその歌。母の声。
そうだ、ずっと昔から知っていたのに。

〈ねんねんころりよ……おころりよ〉

(これが)
十九郎はようやく確認した。噛んだ唇が切れて、血の味が広がる。
(これが皓の歌)

〈坊やは良い子だ　ねんねしな〉

高すぎず低すぎず心を揺さぶる銀の声。
恒久の眠りへ導く子守歌。
至上の楽園へ誘う甘美な響き。
安らぎさえ与える幻惑の波動。
これがその正体だ。見えた。ようやく見えた。

〈坊やのお守りはどこへ行った〉

完璧だ。完璧に強い。
〈妖の者〉の内でも最も高い能力を誇る女。
小刻みにぐらつく膝を支え、十九郎はその敵の姿を見つめた。視野に灼きつけた。
神経が苦鳴をあげている。弱音を吐き続ける。
この女にだけは負けられない。いや、この女だけはこの手で。
この手で倒さなければ。

〈あの山越えて　里へ行った〉

優しく、美しく、包みこむ皓の声音。

噛み切った十九郎の唇から血が伝わり地面に落ちるのを、亮介は見ていた。頭を上げていることさえ至難の技だ。体じゅうから力が失せていく。

もしかして十九郎は自分の盾になっているのだろうか。膝をつきもしない。苦痛の声もあげない。ただ挑み続けて——。

皓の結界の内で、どうしてそこまで己を保てるのか。

亮介の位置からは、かろうじて横顔だけが見えた。いたましいほどに蒼白な顔で、しかし決して敗北を認めぬ瞳で。

（里見さんは……）

土を摑み、亮介は歯を食いしばった。

（波妖気が残って……万全じゃない、のに）

背骨が軋む。地面が迫った。

〈里の土産に　何もろた〉

朗々と歌は伝わり皆はただ見ている。
動けぬはずの十九郎が、動いた。
くじけかけた膝を立て直し、一歩前に出る。
皆が半眼を閉じた。視線は絡み合ったまま。

〈でんでん太鼓に……笙の笛〉

す、と皓が指を上げた。
何かの糸が断ち切られた。
十九郎の身体が、崩れるように地に倒れた。声はなかった。

狭い小道で、真名はブロック塀に追いつめられた。諒の朱雀が走り、光剣が互角にそれと組む。
冴子は肩で息をしていた。何度も繰り返し妖気を消化したのだ。中和と呼んでもいいかもしれない。
「やるな。名前は」

組み合ったまま、諒が訊いた。
「真名」
毅然として女が答える。
「憶えとく」
「そのようなこと、許されぬわ！」
「やってみなきゃわかんないでしょっ」
がん、と剣がはじき合い真名の背が塀についた。諒も勢いで数歩下がる。
文句なしに、凄腕の相手だった。諒と冴子のふたりがかりで、決定的なダメージを与えられない。剣を操り波妖気を放って力尽きない。
（どうする？）
思ったより手こずっている。亮介たちに遅れをとっている。
冴子の疲労は激しいし……。
（いや……やってみるか）
疲労を気遣われたなどと知ったらそれこそ冴子が激怒するだろう。諒は朱雀剣を斜に構えなおし、さらに斬りかかった。
猛然と真名が反撃に出る。力関係が逆転して、諒のほうが押された。スニーカーがアスファルトを擦る。

「冴子！」

ひと言にすべての思惑をこめて、諒が呼んだ。

冴子は諒の背後にいる。振り向けない。伝わっただろうか。

朱雀の剣先がはねあげられた。諒の懐が無防備になる。ここぞとばかりに真名が突っ込んだ。

諒は隙を残したまま、アスファルトを蹴った。後方に高く跳躍する。動きを追って真名がふり仰ぎ、左手をかざす。

そこまでが、諒の誘いだった。

その手から波妖気が放射されるよりも早く、冴子が真名の左手に正面から自分の左腕をからめた。ぐいとねじりあげた。

「おのれっ、よくも！」

妖気を封じられて真名が灼熱した。光剣を逆手に持ち直し、冴子の背に突き立てようとする。

「遅いっ！」

諒は空中で電柱を蹴っていた。反動で戻る。朱雀が閃いた。

剣を持った真名の手首がそのまま宙に飛んだ。

払った朱雀をすかさず返して、袈裟がけに斬った。冴子が膝をつきながら身を翻して塀ぎわ

まで離れる。諒の眼前で音もなく光が破裂した。

——ころん、と緑色の石ころが地面に落ちる。

朱雀剣を消して、諒は「玉」を拾った。ポケットに放りこむ。

決して気持ちのいいことではないのだ。いつも苦さが残る。……

「随分、時間かけちゃってるわね……」

しばしの間を置いて、冴子がぽつりと言った。

目をやって、諒は眉をひそめた。塀に背を預けた冴子の頬は蠟のように白い。さすがに負担が重かったか。

「諒ちゃん、あたし置いてっていいわよ。ちょっとあたし動けないと思う」

「こらこら」

ブロック塀に歩み寄って諒は顔をしかめた。ぽんぽんと肩を叩く。

「ま、とにかく座んなさい。これは命令」

「恩を売られるのって迷惑なんだけど」

「あのな、キミは大切なことを忘れている。俺の感覚だと皓のオーラなんか見えないの。どうやって先に行けと言うのだ」

嘘っぽい台詞だったが、とりあえず素直に冴子は座りこんだ。能力の許容量を超えて動きすぎたらしい。完全に貧血状態だ。

諒も冴子に並んでしゃがみこむ。大きく息をついた。
「こりゃボーナスが出てもいいと思うぞ」
「……手下がこんなに強いんだから、皆って本当に凄いのよね」
呟くように冴子が言う。
「変だと思わない？」
「……どういう意味の変？」
「気力だとか精神力とかで頑張って勝てるレベルじゃないのよ。はっきり言って、『刻印』を使ってもまだこちらの限界を超えてるわ。もう一段階、忍様ならもう一段階置いて万全を期しているはずじゃない？　こんな相手にこの程度の戦力を正面からぶつけるなんて、変よ……」
「忍が、読み違えたのか？」
目にかかる長い前髪をかきあげて、諒は低く訊き返した。冴子が強くかぶりを振った。
「あり得ないわ、そんなこと」
「――でも確かに、忍らしくないとは俺も思うぜ」
冷えこんだ夜道。吐く息が白い。
「大体が、この程度の頭数で攻めにまわるって聞いた時点で驚いたもんな……それに今回、ぎりぎりの局面が多すぎる。まともに命がけだろ」
「……忍様が何を狙っているのか、それが全然わからないのよ」

思いつめたような冴子の声。諒は軽く肩をすくめた。
「ま、わからなくて当然。そんな簡単に手が読めるような奴じゃ頼りないでしょ」
「言うわね」
能天気なようだが、真理だ。冴子は呆れたように顔を上げた。
「諒ちゃんの思考回路って、なんでそんなに幸せに出来てんの？」
「……今、要するに俺のことすごい馬鹿だなあと言わなかったか？」
「うん」
「うんじゃないっ」
「馬鹿は馬鹿なりに使い道があるってことよ」
よいしょ、と冴子が立ち上がる。夜空を見据え、目を細めて。
ぶつぶつ言いながら諒も腰を上げた。ぱたぱたと埃を払う。
「もう平気。行きましょ」
「途中でぶっ倒れたりせんだろーな」
「誰に向かって言ってんの？」
こういう相手に、背負ってやろうかなどとはとても言えない。
「もたもたしないで」
見返る冴子にがうっと吠えてみせて、諒は仕方なく走りはじめた。

皓のオーラは、おぼろげにだが希沙良にもとらえられる。距離がないということもあるのだろうが。

（それでも結構、離されたな）

犬が吠えたてる角を曲がった。このままだと住宅街の外れまで行きそうだ。

ここへ向かうタクシーの中で聞いたことを、思い出す。

十九郎と忍が話し合って出した結論ということだった。皓の技が、何故人を縛り惑わすだけの力を有するのか。

たまらなく懐かしいのだ、と十九郎は言った。

「人の心の原点を摑むんだよ。その本人にとっていちばん強力な記憶を誘い出す」

「それが子守歌？　そういうもんかねえ」

言われてもあまり実感がない。希沙良は疑わしげに呟いた。

「別に、子守歌に限らないと思うけどね……あえてひと言に集約するなら子守歌になるということじゃないのか」

その時は、十九郎の言葉よりも顔色のほうが気にかかっていたのだ。

狭い道が入り組んできて、希沙良は少々苛立った。ままよ、と地面を蹴り、道をふさぐ塀を

のりこえて、一軒家の屋根まで跳ぶ。小さい公園が目に入った。

（いた！）

反対側の道路に着地し、走り出す。足音もたてない。

希沙良はまだ一度も皓と対決したことはない。見くびることはならないと知ってはいるが。話を聞いて、十九郎にとっては脅威であっても、自分にとって皓はそうならないのではないかという気がしていた。確かに十九郎や亮介に対して皓の技は有効だろう。彼らは優しいから。過去に対して優しさを発動するから。

けれど自分は。

（俺は子守歌なんか憶えちゃいないんだよ、十九郎……）

とらわれるものか。『母性』なんか自分は乞わない。

そういえば、と希沙良は思いついた。それこそ忍はそう思っていたのではないだろうか。あの失笑の意味は、彼自身の確信だったのではないか。

（わかっていて——斎伽、わかっていて正面から十九郎をぶつけて！　どういうつもりだ!?）

公園が見えた。結界の気配。

植えこみを越えて、迷わず跳びこんだ。

「おまえっ！」

まず目に入ったのは銀の閃光。

皓のオーラだと気づいた。希沙良は怒鳴っていた。外からはわからなかった。結界に入って初めて……見えた。地に伏す亮介と十九郎の姿。

ジャングルジムの上から皓が見下す。ゆったりと笑んだ。

「またひとり」

喜悦の言葉。ぞっとさせる力があった。

「やめろ！」

倒れ伏したまま十九郎が声を叩きつける。指が地を掻く。

とらわれるものか！　希沙良は顔を上げた。結界が身を包む。

皓が向き直り、指をかざした。

「駄目だ、希沙良！　逃げろ！」

冗談ではない！

身構えて、希沙良は心中で叫び返した。波動が打ち寄せた。

その瞬間、時間が止まった。

世界が白銀に染めあげられた。

11　祈り

赤ん坊の泣き声が聞こえる。
ぼんやりと明るくて、温かくて。身を包みこむ柔らかい感触。
誰かの影。見おろす瞳。のぞきこむ眼差し。——誰？
誰の声？
『……会えないわ』
遠くにかすかに響く声。知らない……。
『伽羅王には会えないわ』
心臓の音。
『私たちはこのままがきっといいのよ……私は空者としては失格。でもあの方は、決してそれを許されぬ立場を、もう背負われてしまっているから』
けれど、と返るもうひとつの声。それを遮って。

『ああでも、私がこの子を犠牲にして生きるよりも……この子が成長して力を持てば、そのほうが伽羅王のために、きっとなるのよ。ならば私は私の生き方に誇りを与えることが出来るわ。そのために自分が空者として生まれたと信じられるわ』

誰かに似ている……その響き。

『だからこれはさだめなのだわ、姉さん』

夏江？　夏江に似ている。その声。……まさか。

まさか、そんな。

憶えているはずがない。

『……でもね、ひとつだけわがままを言ったら、伽羅王は聞いてくれるかしら。あの方は……あの方は、この子の名前を決めてくれるかしら』

憶えているはずがない！

地におさえこまれたまま、亮介は目を見開いていた。

白銀の空間に響き渡る声……言葉。

周囲の景色は見えない。見えるのは目の前の十九郎の肩と、立ち尽くす希沙良と、中空に浮いた皓の姿。

これが……これが希沙良の心に映った記憶なのだろうか。伝わってくる。映像が伝わってくる。

何故、イメージを共有することが出来るのだろう。皆の結界のせいなのだろうか。痛みまでが伝わって、辛い……。

血が伝える記憶なのだろうか。

彼女の肉声が、あのひとの言葉が、希沙良の記憶に残されるなどということがあり得るだろうか。もし本当にそうなのだとしたら。

じり、と十九郎は肩を引き上げた。本当にそうなのだとしたら。

それは救いになるかもしれない。

(わかっているか?)

必死に視線を希沙良に固定し、胸の内で十九郎は呟く。

(自分がどこから来たかわかっているか? 確認出来る、今なら……)

人の原点とは、それを知ることではないのか。



十月十日。

——何も背負うことはない、とその声は語りかける。

おまえはおまえとしてただそれだけで生まれてくればいい。

それから、選びとるのだ。自分の手で。己を己とするための運命を。

(嘘だ、それは嘘だ)

希沙良は反発する。

(それは嘘だ。産まれた瞬間に、俺は全部決められたんだ。望んでいなかったのに。そんなこと、望んではいなかったのに)

あなたを殺そうと、誰が願ったものか。

こんな力を持って生まれたいと、誰が願ったものか。

それを決めたのは、あなたではないか。自分はどうなる? はけ口はどこへ行く?

苦しみばかりが待つ世界に自分を残して。

あなたひとり、どうして死んだ!?

何故、死んだ? ……

それは悲哀。それは怨恨。それは渇望。

たったひとつの命。

失いたくなかったのに!

『――私を離れていく既に私でないおまえに』
伝える想い。
『おまえは私であって私ではない
おまえはおまえひとりであっておまえひとりではない
さあ摑みなさい　おまえの手で
　　おまえ自身の手で
この混沌の内から摑みとりなさい　すべての世界を』
伝わる視線。
『私はあなたをここから見ているから』
残る心。
『誰よりも
誰よりも
誰よりも　幸せになりなさい
　　幸せに、なりなさい！』
残される、希望。

ただ幸福を摑めと。
ただひたすらにそのために生きろと。

血に託された、それは祈り。
名に託された、それは証しか。
（おかあさん）
もう……涙を送ることしか出来ない。

「希沙良！」
十九郎が呼んだ。皓が両の手を合わせ光を生んだ。剣に見えるがそうではない。光の矢。オーラの刃。
「まず……おまえからだね」
皓の目は希沙良に向いていた。掌の上に光矢を浮かせて。
希沙良は動かない。茫然と開いた瞳は何も映していない。皓の姿は見えているが、それが何を意味するかわからないのだ。

「おやすみ、坊や」
凄絶な微笑とともに、皓が死を宣告した。ぐいと腕を上げ、光の塊を――投げた。
あらゆることが、その瞬間に起きた。
それまでの呪縛を忘れたように十九郎が身を起こした。走りこむ。立ちすくむ希沙良の目の前へ。
十九郎の心の叫びが、亮介には聞こえた。何故か響いた。
それだけは許さぬ、と。
いっそ我が身を貫けばいい。
『！』
希沙良の意識がそれをとらえた。視界が復活し、事態を悟った。やめろ、と叫んだ。
やめろ、やめろ……何故おまえまで失われなければならない!?
これ以上奪うな。この俺に、これ以上奪わせるな!!
――ほんの一瞬の、本人さえ自覚する間もなかっただろう、魂の声。
熱い。ふたつの熱情が亮介の内で同時に響き渡った。燃え上がった。炎に巻きこまれる。亮介は胸を押さえた。息が出来ない。思いが溢れる。壊れてしまう……。
がっ、と空間が揺らいだ。
うずくまった亮介の身からまっすぐに広がった白光。

爆発が起きた。すべてを呑みこんだ。
光の矢までも包んで。――

「……これが、妖力中和か」
ジャングルジムの横に膝をつき、皓が唸った。結界は破れ、彼女のまとったオーラさえ見えない。
「なるほど、蟬里が敗れたのもわかる。奴は高望みしすぎたのだ……」
ぎり、と歯軋りして皓はそろりと身を起こそうとする。
ぜいぜいと息をしながら亮介はその動きを見やった。体がいうことをきかない。完全に力が尽きた。
希沙良も同様で、ごろりと地面に転がっている。皓が立つのをわかっていて、何も出来ない。十九郎がその前に膝をつき、やはり為す術なく見ている。
「このようなもの……中和の『磁場』さえ抜ければ……」
わずかによろめきながらも、皓は歩み出した。このままだと逃がしてしまう……。
そこへ。
「まだ、借りは返しきっていないと思うが」

不意に、そう声を投げた者がいた。
「――」
鋭く皓が見る。公園に踏みこんできた影。
悠然と亮介の前まで足を運んでくる。
「伽羅王、か」
「久しいな」
皓に答え、笑みもせず忍が言う。皓が身構えて立った。
「今生でおぬしに会うとは思わなんだわ」
「余計な手出しをせずば、会わずにすんだものを」
静けさに満ちた会話。
「そうであろう……功を急いだやもしれぬ。〈空の者〉が後ろにいるとは気づかなかった。ためにこのような刻印など許して……」
あっさりと皓が呟き右手を上げた。びり、とワンピースの袖を破る。横一文字に灼きついた焦げ跡があらわになった。
それから、皓は左肩に右手の爪を喰いこませた。
みしみし、と嫌な音がした。十九郎が目を瞠った。皓の眉がかすかに揺れた。
左腕が、肩から落ちた。

「はじめから、こうするべきであったわ」
己の手でもぎとった腕をいまいましげに見遣り、皓は言った。一滴の血も流れない。
これで刻印は効力を失う。
忍の瞳に感情はなかった。当然のことのように眼前の光景を受け入れている。
「それで、どうする」
忍が問うた。
「こちらに選択権があるとは思えぬ」
自嘲ぎみに皓が答えた。互角に対峙しているようで、実は違うということだ。忍がつまらなそうに右の手を持ち上げる。
「確かにな」
言葉と同時に、無数の光が皓を襲った。
頬を、肩口を、腕を、腹を——全身を掠め傷つける青白い雨。それは散弾のように瞬時で皓の身を削り貫いた。皓が吹っとんだ。
慈悲のかけらすら忍の横顔には見出せない。
「……ええい、口惜しやっ」
ぼろぼろになり地面に転がって、皓が呻いた。
「九那妃様、九那妃様の復活さえなればっ」

致命的なダメージは未だ受けていない。しかしもう逃れることも出来ない。
その姿は凄然として誇り高く、なおも美しかった。
土にまみれて、皓が顔を上げる。
「さあどうした伽羅王、封じるがよい。逃げも隠れもせぬ」
「……」
見下して、忍は謎めいた表情を浮かべた。心を読めない。一歩、後ろに足を引いた。
あり得ない行動だった。
「伽羅王自らの手により封じられるに価する者とも思えぬ」
凍りついた空気に、それが忍の返答だった。皓が絶句した。
これ以上の屈辱が存在するだろうか。
がくがくと皓の右腕が震えた。怒りだ。腸も煮えくりかえる怒り。
「……それが、返礼か」
ずる、と脚を引きずって皓が立った。
答える必要はなかった。忍はただ目を向けていた。
「九那妃様御復活のため自害も出来ぬ。伽羅王の返礼、しかと受け取った」
地獄の底から上るがごとき声を絞り出し、あとずさる。
皓は一瞬だけ十九郎に視線を投げた。

未練、かもしれない。無言だった。
そして、ふらつく身を支え宙に跳んだ。闇に消えた。

「まかせる、とか言いませんでしたか。確か」
忍の姿を目にとめて、諒が思いきり嫌な顔を作った。
「前から嘘つきなのは知ってたけど、ここまで嘘つきとは思わなかったぜ」
公園の前の道路で、忍はその言葉に極上の笑顔を返した。
「まかせられる相手ならば、そうしていたんだがね」
「――」
これには反撃出来ない。ぐっと諒は言葉に詰まった。
「……い、意地悪……」
究極の意地悪だ、とぶつぶつ呟く。冴子が悄然と沈黙してしまった。
ふたりの様子に肩をすくめるようにして、忍が厳しい空気をやわらげた。身にまとった鋭利な雰囲気が薄れてゆく。
「まあ、まがりなりにも三将軍のひとりだ」
一応、なぐさめの言葉なのだろうか。

諒は深々とため息をつきながら「玉」を取り出した。ほれ、と手渡す。忍は黙ってそれを受け取った。

「ボーナスは？」

「考えておくよ」

ただ、と呟いて忍は冴子を見遣った。

「今回は冴子が頑張ったのであって、諒にボーナスの権利があるかどうかわからないな」

「あっ、そういえばそうよねえ」

「自分で言うなっ、馬鹿者っ」

ぽんと手を叩く冴子を諒が叱りつける。

「だって本当じゃない」

「おまえには謙虚さというものはないのかっ」

「謙虚！　諒ちゃんの口からそういう言葉が出るとは思わなかったわね」

例によって論争はきりがない。

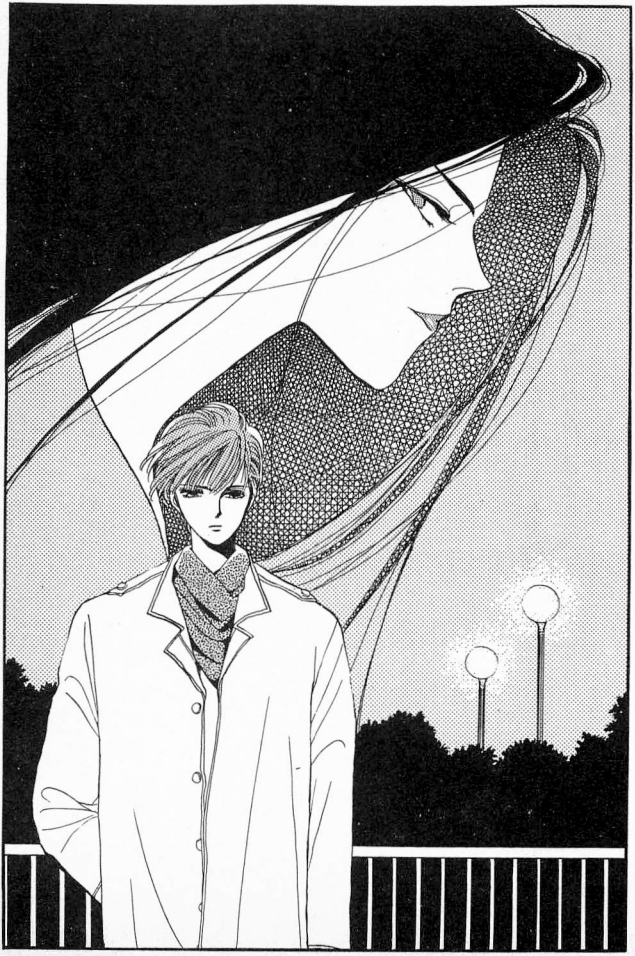
十九郎が忍に歩み寄ってきた。ようやく体力が回復したらしい。

「斎伽さん」

忍の前に立ち、十九郎は真摯な眼を上げた。

「……ありがとうございました」

「恩を売ったわけではないよ」
十九郎の言葉の真意をきっと忍は了解しているのだ。
「わかっているつもりです。けれど……礼を言わせてください」
頭を下げる。忍が低く、短く言葉を発した。
「いずれ……」
「――」
ただそれだけ、ひと言。
歩き出す忍の背を見送って、十九郎はそのひと言を嚙みしめた。
いずれまたあの女は現れる。
勿論、しばらくは活動出来まい。すべてを失い、ひどく傷ついて、力を取り戻すには時間が必要だろう。それでも。
いつか必ず、自分の前に姿を見せる。
その因縁のために忍があの女を封じなかったのであるとは思わないが、けれど……自分は、感謝したかったのだ。
十九郎は公園の内に目をやった。希沙良は片膝を抱えるようにして、地面に座りこんでいた。泣いていた……。
涙が止まらない。自分の意志ではどうしようもない涙だった。希沙良は地面を見つめて、放



心したように泣いていた。あとからあとからこみあげてくる涙は、胸の底にわだかまっていた何かを押し流し浄化する涙だった。

もう……涙を送ることしか出来ないけれど。せめて。

せめて、あなたのためだけに。

どこへ向けるともなく、そう祈った。

とめどなく落ちる涙を拭いもせずに。

「なにか、あったかいもの食べて帰ろう」

背中を叩く手があった。亮介だった。

このお節介、と苦笑したくなる。どんくさいくせに気が回るし。

軟弱野郎のくせに術力中和者だし。

まさに火事場の馬鹿力。

(ほんと、バカだよなあ……)

つくづく思う。ボソッと答えた。

「……お好み焼きが食いたい。だんぜんイカ玉」

「なんでいきなりお好み……店開いてないよ、こんな時間」

はっきり言って真夜中である。亮介が苦い顔をした。

「イカ玉がいいっ。牛丼やだ。ラーメンもやだ」

「おでんは？」
「やだっ。言っとくけど屋台も嫌いだ」
「わがままっ」
くすくすと希沙良は笑った。ごろんと地面に倒れこむ。星が見えた。
「イカ玉食えなかったら帰んないぞ」
「勝手にすれば」
「ひっでー、俺が帰れなくてもいいのかよ……」
なんだか妙に笑いたい気分だ。
「帰れなくなったら泊めてやるよ。行こう、崎谷君」
落ち着きはらった十九郎の声が聞こえた。論点をずらしている。むかっ、と呟いて身を起こしたら、目が合った。
クレームをつけるはずだったのに、何故か希沙良は思わず笑ってしまっていた。

終章　それから

終業式の日は、朝から雨だった。
昇降口で、希沙良は振り向いた。傘を閉じながら晶子が入ってくるところだった。
下駄箱の前は混雑がはげしい。
「おはよう」
晶子が言った。
さりげない笑顔で。
きっとそれは勇気だ。彼女の優しさだと思えた。
「……おはよう」
雨の滴を乗せた彼女の髪が短くなっているのに、その時になって希沙良は気づいた。

「いや、確かに、仕切り直しとは言ったけどね」
渋谷駅の改札前で、十九郎は複雑な顔をした。翌日のことである。
「だって崎谷君はもう観てるんだろ？　なにも同じもの観なくても……」
「いいんだよ、何回観たって。いい映画は何回観てもいいんだって」
「あれってそんなにいい映画だったか？」
ぼそっと亮介が口を出す。希沙良が殺気を含んだ目を向けた。
「あたりまえだっ。俺がそう決めた」
「あ、そ……」
反論出来ない。さすがは希沙良である。
「で、なんで俺のことは誘ってくんないんでしょーか」
勝手にへばりついてきた諒が恨めしげに言った。
「ひょっとして仲間はずれなんだろうか俺って。グレちゃお」
「うざったい奴」
希沙良はにべもない。まあまあ、と亮介は諒をなだめた。
それにしても、と亮介は思う。
「……男四人で映画って不毛だ……」
「それは言えるかもしれない」

十九郎が片手で口許を覆って、ぽつりと同意する。希沙良がぎっと睨みつけた。

そもそも、他の三人に囲まれると亮介は見下ろされまくってしまうのである。この身長差がなんとも気を重くする。この四人でぞろぞろ動くのかと思うと……。

「いいじゃんたまにはっ」

希沙良がむくれながら言い返した。

「だって俺映画っつーといつも女連れでさあ、いいかげん女と映画ってパターンは飽きがきたし」

（……言うよなあ言うよなあ、こいつ）

当然、その相手は毎回違う女の子なのだ。亮介は内心で頭を抱えた。

晶子に謝ったと聞いた時には大した進歩だと感心したものだったが、結局やっていることは変わらんではないか。

ふと思いついて、亮介は目を上げた。希沙良が気づいて見返す。

「なんだよ」

「希沙良ってさ、もしかして少女マンガを地で行ってないか？」

「――」

まともに希沙良が返答に詰まった。諒と十九郎が、同時にどっと爆笑したのは言うまでもない。

――おわり――

あとがき

ハイスクール・オーラバスター第二作をお届けします。

今回は、まあ読んでいただければおわかりと思いますが、なんとも大変な話でありました。いやー書いてて気持ちよかった！（笑）

良くも悪くも私の本性が出まくった作品になったと信じております。全力投球、手加減なしであります。もっと上手くなりたいというのは常の願いですが、手を抜いたという言い訳はしたくない。結構はずかしげもなくこういうことを言う。

なにはともあれ、御意見御感想、御叱責御質問、その他もろもろ、お手紙をお待ちしております。もう、この本の内容についてはあまり言えない若木。

アクション好きだし私は。ああ疲れた。幸せだなあ。

さて、前回これがシリーズものであることを明記しなかったので、『天使はうまく踊れない』の続きは本当に書くのだろうな、というお手紙を沢山いただきました。ありがとうございました。返事が遅れて申し訳ない。お手紙を読みながら「今、続き書いてるっ。書いてるぞっ」と叫んでおりました。

私としては、今回の本は前回のと二冊あわせてようやくシリーズの序章になっているのではないかと思ってたりします。要するに、前回あんまり目立てなかった連中の救済本になるのかな。（おいおい本当かー？）

お手紙を見る限りだと、今のところ諒が一番人気です。はっきり言ってダントツです。これにはびっくりした。（う、ごめん諒ちゃん）あとは亮介と忍が並んで二番手につけてたと思います。今後どう変動するか非常に楽しみですねー。わははは。

あ、そうだ。お手紙と言えば前回のあとがきについて「本当に手紙の返事、来るんでしょーね。あとがきで宣言した以上、責任とる覚悟はあると見た」と、鋭くも正しい突っこみを入れられましたが、これについては勿論責任をとらせていただきます。まかせろっ。——とか言って、ちょっとずるしちゃったりするんですけど（正確には返事のコピーしか送れない時があるかもしれないわけです。ごめんなさいです）。

でも本当、全員にお返事したいので、出来たら返信用に住所と名前はちゃんと書いておいてくださいまし。返事くださいって書いてあるのに住所がわからない手紙とかあると泣いてしま

うよ私は。「もしかして私のことかも」と思ったら今からでも遅くない、教えてやってください。よろしく。

で、キャラクターについて、いろいろと質問をいただきましたが。

えーとですね、話の中でおいおいわかっていくことは置いといて、絶対にわからないことについて答えたいと思います。私が言わなければわからないこと。

メインキャラのネーミングのことです。由来というか出生の秘密というか。

まず全体に言えることですが、モデルはいません。あとから、あっ、この人似てるなあっていう人が見つかることはあるけど、キャラのほうが先です。

で、私にとって古い順に書いていくとですね……諒がいちばんつきあいが長いです。中学二年のころからかな。かれこれ八年。勿論当時からは彼自身も成長したし人格も少し変わりましたけど、この名前は本当に最古参なので、七人の中でもなんとなく趣きが違うという。性格から、リョウという音が合っていると思ったんです。諒という字は、その辺にあんまりない字なので友達からもらいました。水沢ってのも性格のイメージだな。

次が多分、冴子です。高校二年のころかなんかに、諒の部屋に女の子が入りびたっているというシチュエーションを書いて、この性格は冴子しかない、と思って名前が決まった。七瀬っ

て名字は（まだ本編で書いてないのに先にバレてしまった。ああどうしよう）わかってる人は多いと思いますが若木は七瀬シリーズが好きなんです。美少女といったら七瀬。す、すみません恐れおおいなあしくしく。

そしてっ、これは質問が多かった。十九郎です。実はですねえ、高校三年の時に夢に出てきた人であります。夢の中で十九郎、と呼ばれている奴がいて、十九郎ってこの字なのかなあ、他に考えられないよなあ、とか思いつつ目を覚ましたという。信じられない名前だよねー。（作者が言ってどうする）里見というのは、頭のいい奴に絶対つけようと思っていた名字です。や……やっぱり八犬伝のせいです。つくづくミーハーだなあこいつ。

とりあえず今回は三人分バラしましたので、残りはまた次の本で書きます。あんまり一度にバラしても面白くないからねー。

それでもって今度は若木自身のことに話がとんだりします。

若木未生、というのはペンネームです。とにかくこの字を使いたかったわけです。で、ちょっと混乱を招いてしまったんですが、コバルト・ノベル大賞の佳作をいただいた時はワカキ・ミセイと私はカナをふりまして、雑誌でもミセイで載りました。その後、これはちょっと読みにくかろうと思ってミオにしたんです。一応ですね、私自身はこの字が使えればよ

かったので、ミセイでもミオでもミキでもミウでもなんでも良いと思ってます。さらに言えば若木のほうもワカギでもワカキでも良いと思う。いちばんきれいだと思う音で読んでもらえたらいいです。

ただし本屋さんで注文するときはワカギ・ミオと言わないと本屋さんが困ると思うぞ。

なんかいろいろ書いてしまった。

では、いちばん大切なことを言わせてください。

お手紙のことです。しつこいけど本当、沢山もらいました。これは私は誇っていいと思っています。自分で書いたんじゃなくて（笑）みんなが大切な時間を使って書いてくれた手紙だからね。読んでくれた人が頑張って送ってくれた手紙だから、これは私の手柄ではないのだ。だから誇れます。ありがとうっ。

それでですね、「作家に初めて手紙を書く」とか「普段あんまり手紙書かない」という人が意外と多かったんですが、特にそういう人たち、それからそうじゃなくても結構沢山の人が「こんな書き方は失礼じゃないかしら」「こんなふうに書いてわかってもらえるかしら」って思ってるのが、すごくよくわかった。

大丈夫。私はちゃんと読んだ。

思ったことを思いどおりの言葉で書けば絶対に伝わるから。ていねいに書きたいことも乱暴に書きたいこともある。それをそのまま書けばいい。思ったことを全部書けばいい。そしたらちゃんと伝わる。私には伝わってる。

考えたこと、感じたこと、話したいことを話してくれればいい。言葉に出来なければ描いてもいい。

で。悩んでること、迷ってること、感じていることをいろいろみんなが書いてくれたから。最初はね、それに私もちゃんと言葉を返さなきゃならないだろうなと思ってた。けど間違っちゃいけない。私は小説書きです。

だから私がやるべきこと、私に出来ることは、小説を書くということだ。そうだよね。みんなが抱えていることにそのまま生に、ダイレクトに返る言葉は、私は言わない。言いたくても資格がないから。

私は小説をみんなに返すから。

みんなの悩みに対するヒントは私の小説の内にあるかもしれない。ないかもしれない。みんなの思いに対する答えは私の小説の内にあるかもしれない。ないかもしれない。それを決めるのは私じゃない。読んでくれるあなたたちです。

私にそれ以上の権限はないし、それ以上の責任もとれない。そしてこれがいちばん正しい方法だと私は信じています。

私は、あくまでもどこまでも果てしなく小説書きだから。

ものがたりしか返せない。

それだけのことに、私は私の全部を賭けて責任をとりたいと思っています。こんな小娘だけどさ。

だからこれからも私はものがたりを返しつづけていく。手紙を待ってる。感じたことを教えてほしい。そしたら何かが返せる。

誉めてもらいたいとか認めてほしいとか、そういうことのために小説を書いているんじゃない。

だから楽しいことも苦しいことも全部、とにかく全部ぶつけていい。

大丈夫。私はちゃんと読みます。

そして本当は、手紙を書かなかった人たちがどう思っていたか、それがわかるくらいになりたい。本当はね。でもちょっとね、それは、それを私が決めてしまうことは、やっぱりしてはいけないことだから。それをしたら傲慢になってしまうから。やっぱり何か伝えたいことがあ

ったら、行動してください。伝えてください。私に、自分に届いて初めて、私は確認することにします。

手紙を書いてくれてありがとう。
本を買ってくれてありがとう。

だけど何よりも大切なのは。それよりもいちばん大切なのは。
この物語を読んでくれてありがとう。
そういうことだよね。
忘れないようにしたい。

この物語が世に出ることにたずさわってくださったすべての人。（特に川野さんっ。ありがとうございますっ）
この物語が世に出ることを可能にしたすべての物事。多分、この時代というものに対してさ

え。こんな情けない時代でも。
私は自分の内のありったけの感謝を向けます。ありがとう。それから、今後もよろしく。

まだこの物語はずっと続きます。
きっとね。
では。またお会いしましょう。

若木未生

追伸　この作品を、私の両親に捧げます。
思えば、夜寝る前にあなたたちが読んでくれた一冊の本からすべてがはじまったわけです。世界じゅうでいちばん、そのことに感謝しています。

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101－50 東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
若木未生先生

わかぎ・みお
1968年12月２日、埼玉県生まれ。射手座、Ａ型。現在、早稲田大学文学部在学中。1989年４月『ＡＧＥ』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。趣味は絵を描くこと、コンサートに行くこと。Ｎ響と森高千里とユニコーンが現在のお気に入りで、自らをミーハーと断言する。尊敬する人物は、筒井康隆。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』がある。



セイレーンの聖母

COBALT-SERIES

1990年３月10日　第１刷発行
1993年３月20日　第16刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
（3230）６２６８（編集）
電話　東京（3230）６３９３（販売）
（3230）６０８０（制作）

印刷所　株式会社美松堂印刷所
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1990
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611395-3 C0193

〈好評発売中〉

集英社文庫 コバルトシリーズ



空の者、術力…一体、俺に何がおこってるんだ!?

天使はうまく踊れない

ハイスクール・オーラバスター





若木未生



人気急上昇中の新鋭がやさしく描く
学園ファンタジー！

高一生の崎谷亮介には、見えるはずのないものが見える。そんな彼のまわりに、最近、妙になれなれしいヤツラが出没しはじめた。謎の転校生・諒、美少女・冴子、彼らは何だかコワーイ話をしはじめて…ああ！







イファンの王女

不吉な夢をみてから、アルスリーアの周囲に暗雲が。

カル・ランシィの女王①

竜の牙を越えて

呪いをかけられた恋人のために、王女は旅へ。

宇宙に吹く風 白い鳥

卒業論文のため、鴨子はカリスト星へ向かう。

聖獣復活譚 前

まどろみの守護者

ドーリア国の王女!?自分の運命を知ったセラ。

聖獣復活譚 後

銀の守り手

セラは、兄を捕えている敵に恋を!?

破妖の剣1

漆黒の魔性

王女救出にむかった剣士ラエスリール。

アクションFT（ファンタジー）で人気
急上昇!!愛を
やさしく描く
注目の新鋭。

前田珠子の本



コバルト・ノベル大賞
募集中!

〈入選作〉 正賞の盾と副賞100万円

〈佳作〉 正賞の盾と副賞50万円

〈選考委員〉 岩館真理子／菊地秀行
高橋源一郎／氷室冴子 (50音順・敬称略)

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。

この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売!

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。